

# 聖徒の道

5  
1990



末日聖徒  
イエス・キリスト  
教会



# 聖徒の道

1990年5月号



## 一般

2

大管長会メッセージ  
御父の持てるすべてのもの  
トーマス・S・モンソン

8

きっとモルモン経が  
気に入るはずよ  
チェリー・L・モロー

10

私たちはとても  
祝福されています  
ベニグノ・パントハ

16

良いものをさらに  
良いものに換えるために  
夫婦宣教師  
M・ラッセル・バラード

22

すべての会員は宣教師である  
福音を分かち合うための  
簡単な方法

34

兄弟愛  
ドン・L・サール

38

とにかく始めよう  
リチャード・ダニエル

## 青少年

25

伝道に出る準備  
今から始めよう！

マスター聖句

服装と身だしなみ

伝道の召しを  
どのようにして受けるか

持っていく物

教会における礼儀

宣教師の日課

30

質疑応答  
私は宣教師になれるでしょうか

42

〈創作〉  
ぼくたちの奉仕計画  
アルマ・J・イエーツ

## 定期特別記事

1

読者からの便り／編集室から

24

家庭訪問メッセージ  
奉仕を通して主を覚える

33

モルモンメッセージ  
飢えと闘う

## 子ども

2

お月見の夜に  
ナネット・ラーセン・ダンフォード

5

おもちゃばこ  
家族合わせ  
スーザン・ミークス

どのピエロかな？  
ロバータ・L・ファラール

伝道に出たら  
エルマ・レーノルズ

6

小さなお友達へ  
デレク・A・カスバート長老

8

少年せんきょうし  
ジョン・B・フィッシュ

10

分かち合いの時間  
いのりの答えを受ける  
ローレル・ロールフィンク

12

サラのように  
クリア・ミシエカ

14

リーハイのゆめ

## 読者からの便り／編集室から

### 読者からの便り

#### 読書好き

私は、皆さんが偉大なみ業に携わっていることをよく承知していますので、そのことを伝えるように靈感を受けました。皆さんが天父のみ業をなすときに、戒めに従えるように導くすばらしいみたまが御父から注がれています。天父のみ業は世界の至る所で大勝利を取めるのです。

神は様々な方法を通して働かれますが、私に与えられた祝福のひとつは、私を読書好きにしてくださったことです。「リアホナ」(スペイン語版)のような教会の出版物を通して、私は信仰、忍耐、清さ、自制、キリストの純粋な愛を学ぶことができました。ジョセフ・スミスの時代と同様に、今日も神が私たちにみ言葉を啓示されるということは、私にとって重要な意味を持っています。とりわけ私と家族がこの真の教会の会員であるということをしるしく思っています。

ホセ・エドアルド・モリナ・ガティカ  
グアテマラ、グアテマラ市

#### ためになる読み物

オランダの末日聖徒の家族にとって、ためになる読み物を見つけるのはそうたやすいことではありません。教会の標準にそぐわない本や雑誌が多く、このような状況では、回復された福音の力を受けられなくなりそうです。それで私たち家族は全員、毎月「デ・スター」(オランダ語版)が発行されるのを楽しみにしています。教会幹部の話や聖徒たちの特別な経験に深く感動して

います。  
ニコレッタ・スタインフォルタ  
オランダ、レーワルデン

#### 宣教師のくれた教会の機関誌

「リアホナ」(スペイン語版)を読み、教会幹部のメッセージや証を受けることは、私にとって特権です。そこには予言と祝福が述べられています。リアホナに載っている記事を書く幹部の兄弟たちが皆、福音に対する強い証を持っていることを、私はよく知っています。

外出の際には必ず、私の好きなこの「リアホナ」を持っていきます。靈感あふれるこの機関誌を家に置いていくようなことは決してしません。

私はモルモン経よりも先にこの「リアホナ」を手に入れました。それは長女が肝炎を患っていた1960年代のことでした。宣教師が来て、娘に読ませるためにこの機関誌をくれたのです。本文に目を通した私は、デビッド・O・マッケイ大管長の次のメッセージに強く心を引かれました。「いかなる成功も家庭の失敗を償うことはできない。」(1964年4月総大会)このメッセージを読んで、私は自分が育った家庭のことを考えました。

愛する兄弟姉妹、この機関誌に記された靈感あふれるメッセージを読むことにより、私たちの信仰は強められます。それは私たちの人生の指針となる聖典であり啓示なのです。  
メルセデス・ゴドイ・デ・バントハ  
チリ、サンチアゴ  
ラ・フロリダステキ部  
ラ・フロリダ第2ワード部

#### モルモン経を人々に贈る

毎月発行される「ソンドエボ」(韓国語版)は私の人生に幸福をもたらしてくれるもののひとつです。どのページを開けても、天父が生ける予言者に啓示された靈感あふれるみ言葉を読み取ることが出来ます。

先日の「ソンドエボ」の中に、「モルモン経で地を満たす」、すなわち私たちの愛と証を世の人々に伝えるというエズラ・タフト・ベンソン大管長の勅告が載っていました。そこで私は今年目標として、家族の写真と私の証を添えたモルモン経を100冊、職場の友人やワード部宣教師に贈ることにしました。

私は予言者の言葉が私たちに対する主のみこころを表わしていると確信しています。そしてその言葉に従うならば、主が祝福してくださることを知っています。

リー・ホサン  
韓国、ソウル北ステキ部  
チュン・ジャンワード部

#### 編集室から

信仰深い読者の皆さんに心よりお礼申しあげます。皆さんからの手紙、記事、物語などを募集しています。(投稿の際は、氏名、住所、所属ステキ部、地方部、ワード部、支部名を記入してください)これまでいただいたお便りに感謝するとともに、今後もさらに多くのお便りをお待ちしています。□

## 聖徒の道

1990年5月号

本誌は「エンサイン」「ニューエラ」「フレンド」の記事を抜粋した、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊—イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊—インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊—アイスランド語。

大管長会：エズラ・タフト・ベンソン、ゴードン・B・ヒンクレー、トーマス・S・モンソン  
十二使徒定員会：ハワード・W・ハンター、ボイド・K・バックナー、マービン・J・アシュトン、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マッ

クスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット  
顧問：レックス・D・ピネガー、ジーン・R・クック、ウィリアム・R・ブラッドフォード、フランシス・M・ギボンズ、ジェフリー・R・ホルランド  
編集長：レックス・D・ピネガー  
教科課程管理部実務部長：ロナルド・L・ナイトン

教会機関誌ディレクター：トーマス・L・ピーターソン  
編集主幹：フライアン・K・ケリー  
編集副主幹：デビッド・ミッチェル  
編集主幹補佐：アン・レムリン  
編集主幹補佐/こどものページ：ティエーン・ウオーカー  
アートディレクター：M・マサット・カワサキ  
デザイナー：シェリー・クック  
制作：シドニー・N・マクドナルド、レジナルド・J・クリステンセン、ジェーン・アン・ケンプ、ティモシー・シェパード、ステイブ

ン・デイトン  
配送部長：ジョイス・ハンセン  
聖徒の道 1990年5月号第34巻第5号  
発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会  
〒106 東京都港区南麻布5-10-30  
電話 03-440-2351  
印刷所 株式会社 精興社/クロスロード  
定価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)  
半年予約 1,100円(送料共)  
普通号 150円、大会号 350円

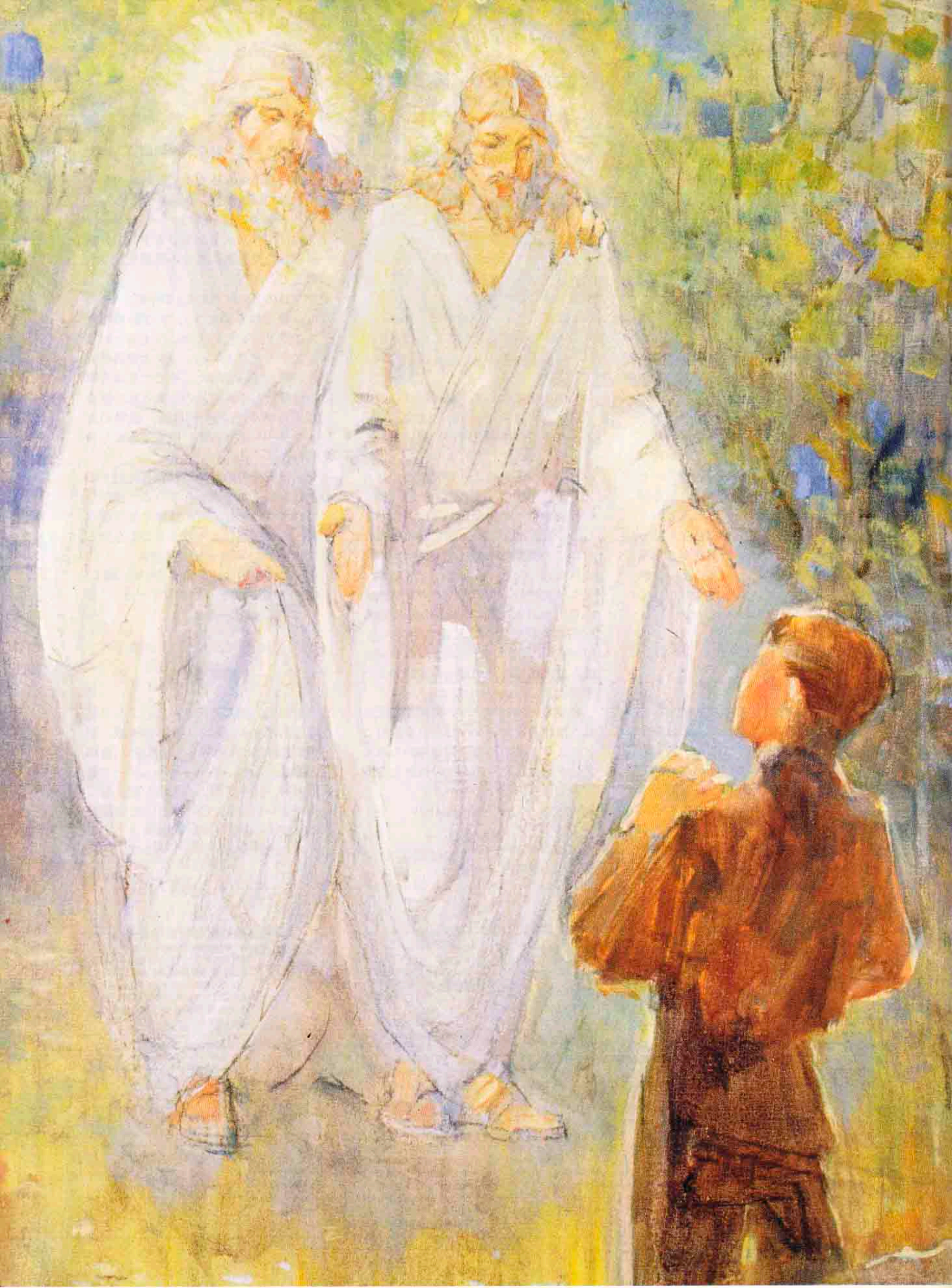
International Magazine PBMA 9005JA  
Printed in Tokyo, Japan.  
Copyright © 1990 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.  
●定期購読は、「聖徒の道予約申し込み用紙」でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座番号/東京0-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。

●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106 東京都港区南麻布5-10-30 管理本部経理課 ☎03-440-2351 (代表) ●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒213 川崎市高津区溝の口131/末日聖徒イエス・キリスト教会資料管理配送センター ☎044-811-0417

The Seto no Michi is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150. Application to mail at second class postage rates is pending at Salt Lake City, Utah. Subscription price \$14.00 a year. \$1.50 per single copy. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A. Subscription information telephone number 801-240-2947.

POSTMASTER: Send address changes to Seto no Michi at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A.







# 御父の持てるすべてのもの

大管長会第二副管長

トーマス・S・モンソン

**何**年も前、我が家の末息子クラークが12歳の誕生日を間近に控えたころのことです。ある日、クラークと私は教会本部ビルを出たところで、ハロルド・B・リー大管長にお会いしました。リー大管長は私たちの方へ来て、声をかけてくださいました。クラークが間もなく12歳になることを私が話すと、リー大管長はクラークの方を向いて、こう尋ねました。「12歳になったら、どんなことがありますか。」

するとクラークは何のためらいもなく、「執事に聖任されます」と答えました。

リー大管長もその答えを期待しておられました。そして大管長は息子に、「神権を持つのはとても大きな祝福です。そのことを忘れないようにしてください」という勧告をくださいました。

私がクラークや神権を持つすべての若人に対して心から望むのは、神権を尊び、それに伴う義務を忠実に果たすことです。

あるとき、デビッド・O・マッケイ大管長は教会役員を前にした話の中で、神権に関して勧告を与えられたことがあります。マッケイ大管長が船旅をしていたあるとき、乗客のひとりが近付いてきて、「あなたは末日聖徒イエス・キリスト教会の指導者ですか」と聞いてきたそうです。大管長が「そうです」と答えると、その人は、ほかにも教会が数多くある中で、末日聖徒イエス・キリスト教会を際立たせる教えとしてどのようなものがあるかと聞いてきました。そのとき、大管長は最初、神聖な権能という点をあげようと思いましたが、カトリック教会、コプト派教会、ギリシャ正教など、神の権能が伝えられていると主張する教会がほかにもあることに気づかれたそうです。神聖な権能というだけでは、相手の質問に対する完全な答えとはなり得なかったのです。

神権は賜というよりも  
奉仕の務めであり、  
また人々を高め、  
彼らに祝福を与える  
ための機会です。



そのときマッケイ大管長は靈感を感じ次のように答えられました。「子どもの教会とほかの教会で際立って違うのは、直接の啓示によって神聖な権能が授けられているという教えです。」

兄弟姉妹の皆さん、あの「千八百二十年の早春、一点の雲もない美しい朝」(ジョセフ・スミス2:14)の出来事を思うと、私たちの心は感謝の思いで満たされます。その日、ジョセフ・スミスはひとり森の中へ行き、神に祈りを捧げました。そのときの様子を描いた彼の言葉には圧倒的な力があります。「私は筆紙に尽し難い輝きと栄光とを有ちたもう二人の御方が私の真上の空中に立ちたもうのを見た。そしてその中のお一人が私に言葉をかけて私の名を呼びたまい、他のお一人を指して『こはわが愛子なり、彼に聞け』と仰せられた。」(ジョセフ・スミス2:17)これは直接の啓示による神聖な権能を示すすばらしい事例です。

1829年5月15日には、もうひとりのみ使い、バプテスマのヨハネが地上を訪れました。ペンシルベニア州ハーモニー近郊を流れるサスケハナ川の岸で、ジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリの頭に手を置いたヨハネは、ふたりに神権を授け、次のように言いました。「汝ら、われと同じ業に働く僕らよ。救世主の御名によりて、われ汝らにアロンの神権を授く。こは天使の導きと恵み、悔改めの福音、罪を赦すために水に沈むるバプテスマなどの鍵を握る神権にして、まことにレビの子孫が主の御前に再び適いて捧物を捧ぐる時まで、この世より決して再び取り去らるることなし。」(教義と聖約13:1)このみ使いは自分はメルケゼデク神権の鍵を持つペテロ、ヤコブ、ヨハネの指示の下に働いている者であると告げました。このあとに、聖任とバプテスマの儀式が行なわれました。これもまた直接の啓示によって与えられた神聖な権能を示す事例のひとつです。

それからしばらくして、ペテロ、ヤコブ、ヨハネが、メルケゼデク神権の祝福を与えるために、地上に遣わされました。主から聖任されたこの3人の使徒は、ジョセフとオリヴァを使徒として、また主のみ名を証する特別な証人として確認しました。この天からの訪れを際立たせているのも、直接の啓示による神聖な権能です。

これらの一連の出来事のひとつの結果として、私たちは皆、自分に託された義務を忠実に果たすという責任を負っています。その責任は祝福されたすばらしい機会であり、神聖な務めでもあります。神権の誓詞と誓約は私たちすべてに関係するものです。メルケゼデク神権者にとっては、神の律法に忠実に従い、与えられた召しを全力を尽くして遂行するという責任を宣言したものです。またアロン神権者にとっては、将来授けられる義務と責任に関する意志の表明となるものであり、それを通して彼らは今から自分自身を備えるのです。

この誓詞と誓約は主ご自身のみ言葉によって次のように定められています。

「およそ忠実にしてわが今語れる二つの神権を得、而してその天よりの召を全力を尽して遂行する者たちは、『みたま』により聖められてその肉体再新さる。

これらの者はモーセの息子たちとなり、アロンの息子たちとなり、アブラハムの子孫となり、また教会員にして王国の民となり神の選民となる。


主は言う、またすべてこの神権を受け入る者は、われを受くるなり。そは、わが僕らを受け入る者はわれを受くればなり。

また、われを受け入る者はわが父を受くるなり。

而して、わが父を受け入る者はわが父の王国を受くるなり。この故に







わが父のもてるすべては彼に与えらるべし。」(教義と聖約84：33—38)

予言者ジョセフ・スミスはあるとき、次のような質問を受けたことがあります。「ジョセフ兄弟、あなたはよく自分の召しを全力を尽くして果たすようにと言いますが、それはどういう意味ですか。」これに対して彼はこう答えたと言われています。「全力を尽くして召しを果たすとは、自分の働きを通して人々に天の光を輝かせるために、神権を尊び敬うことです。長老としての義務を理解し、それを実行する人こそ、召しを全力を尽くして遂行している人ということが出来ます。」

召しを全力を尽くして遂行する特権と機会は、思いがけない方法でやって来ます。私がまだ執事だった時のことです。祭司が聖餐の祝福の準備をしているときに、私たち執事は礼拝堂の最前列の長いすに座っていました。祭司の中に、リランドというすばらしい声の持ち主がいました。彼が捧げる聖餐の祈りの言葉は、はっきりとした美しい声で響きわたりました。聖餐会が終わると、彼をほめたたえる人が数多くいました。それで彼は少し高慢になっていたように思います。

もうひとりジョンという祭司がいました。ある日このジョンが美声の持ち主リランドと並んで聖餐の祈りをするようになりました。ジョンは聴覚障害があつて言葉を話すのにも不自由なところがありました。私たち執事はジョンが祈るのを聞いて、声をひそめて笑ったことがよくあります。

パンが裂かれ、賛美歌が歌われました。リランドが祈りの準備をすると皆が頭を垂れました。ところがなかなか祈りの言葉が聞こえてこないのです。その沈黙はまるで永遠に続くかのようなものでした。私が目を開けると、あわてふためいて祈りの言葉を印刷した小さなカードを捜しているリランドの姿が見えました。カードはどこにも見つかりませんでした。そのうちにほかの人たちも目を開け、一体どうしたのかという表情で前の方を見始めました。

そのとき、聴覚と言語に障害のあるジョンが静かに手を伸ばしてリランドに位置を代わらせました。そして、ひざまずき、自分が記憶していたあの祈りの言葉を唱えたのです。「永遠の父なる神よ、われら御子イエス・キリストの御名によりて願いたてまつる。ここにこのパンをいただくすべての人々が……。」(モロナイ4：3)ジョンはひと言も間違えませんでした。

その日、礼拝堂を出るときに、リランドはジョンに「きょうは助けてくれて本当にありがとう」と言いました。

ジョンはそれに、「ぼくたちは同じ定員会で責任を果たしている祭司同士だからね」と答えました。

自分の召しを全力を尽くして遂行したこの祭司は、多くの人々の生活と物の見方を変え、神はみずから召された人をふさわしく備えてくださるといふ永遠の教訓を与えてくれたのです。

神権は賜というよりも奉仕の務めであり、また人々を高め、彼らに祝福を与えるための機会ということが出来ます。

私が知っている若人の多くは早く大人の世界に入りたいと、その日を待ち望んでいます。若いアロン神権者に対して責任を持つ人々は、彼らに学ぶ機会を与え、ふさわしい模範を示してください。

メルケゼデク神権者である私たちにとって、召しを全力を尽くして遂行する特権は至る所に見いだすことが出来ます。私たちはイスラエルを見守る羊飼いです。飢えた羊が私たちを見上げ、命のパンを与えられるのを今や遅しと待っています。私たちには神の羊の群れを養う備えができてい





M. Tellechea



でしょうか。私たちは人の値の尊さを認識しなければなりません。またひとりといえども神の大切な息子を失うようなことがあってはなりません。

神権の召しを全力を尽くして遂行する人が存在するところには、必ず奇跡を見いだすことができます。信仰が疑いに、また無私の奉仕が利己的な働きに取って代わる時、神の力によって、神のみこころが果たされるのです。

約8年前、私は東ドイツのドレスデンに行き、わずかな数の教会員と共に小さな墓地を訪ねました。夜のやみは深く、冷たい雨が一日中降り続いていました。

そこに行ったのは、昔主のみ業のために働いていたさなかにこの世を去ったある宣教師の墓を訪ねるためでした。夜の静寂がその墓碑の前に立った私たちを包んでいました。懐中電灯の光に照らされた墓碑の上には、次のように文字が刻まれていました。

ジョセフ・A・オット

1870年12月12日ユタ州バージンシティにて誕生

1896年1月10日ドレスデンにて死亡

(『主の時によって』「聖徒の道」1989年5月号, pp.7-9 参照)

懐中電灯の光を頼りに、その墓をよく見ると、周りの墓とは様子が違っていました。墓碑はよく磨かれ、周りに雑草がなく、芝もきれいに刈り取られていました。そしてそこに植えられた美しい花は、それを世話する人のやさしさと愛を物語っていました。私は「この墓をこれほどきれいにしてくださったのはどなたですか」と聞いてみましたが、返ってきたのは沈黙だけでした。

最後になって、12歳の少年がそれをしたのは自分だと言いました。彼は両親や指導者に言われたのではなく、自分の意志でその仕事をしようと決心し、それを果たしていたというのです。彼の心にあったのは、主のみ業に仕えていたさなかに世を去った宣教師のために何かをしたいという気持ちだけでした。その少年はこう言いました。「国の法律で禁じられているので、父もそうでしたが、ぼくは伝道に出ることはできません。宣教師が葬られたこのお墓をきれいにすることによって、ぼくは伝道を身近に感じるすることができます。」

私は彼の信仰の深さを思い涙を流し、宣教師になりたいという大きな望みをかなえられない彼の心を持って悲しみを感じました。しかし神は彼の祈りを聞き、その信仰を認め、執事としての召しを全力を尽くした彼を誉れとなさいました。

ドレスデンでのあの特別な夜から何年かの歳月が流れました。東ドイツでは数多くの重大な出来事が次から次へと起こっています。神の宮居をはじめ、ワード部やステキ部の建物も各所に建てられています。そして教会

の完全なプログラムが実施されて教会員の生活に祝福が注がれています。

1989年3月30日木曜日に、50年ぶりにこの教会の宣教師が国境を越えて東ドイツへ入りました。今では多くの求道者がレッスンを受け、バプテスマも行なわれています。

ジョセフ・オットの墓をきれいに掃除していたトビアス・グルクハルトというあの少年は今何をしていますでしょうか。当時執事だった彼も、今では長老です。1989年5月28日に彼は7人の同僚と共に宣教師訓練センターに入所しました。彼らは、東ドイツから海外での伝道に召された最初の宣教師です。彼にその気持ちを聞いてみると、こう答えてくれました。「伝道の業を始めるのが待ち遠しくてたまりません。ジョセフ・オットが私を通して地上での召しを果たせるように、熱心に働きたいと思います。」

皆さん、ジョセフ・オットの霊が、その命の源である神のみもとへ帰ってからすでに久しい年月が流れています。彼の肉体は遠く離れたドレスデンの穏やかでよく手入れされた墓地に眠っています。しかし彼の宣教師としての精神は、ひとりの忠実な長老の働きの中に受け継がれています。それは執事だったときに、墓地の芝を刈り、花を添え、墓碑を磨いたあの若者です。彼は伝道に出ることを望みながら、一度は拒まれました。しかし、今は夢がかなえられて伝道に出ています。

私は、天父が貴い神権を持つすべての人々に、絶えず祝福と靈感と導きをくださるよう祈っています。(ソルトレークシティ、テンプルスクウェアのタバナクルで開かれた神権記念ファイヤサイドにおける講話より) □

#### ホームティーチャーへの提案

ホームティーチングのときに以下の点について話し合うとよいでしょう。

1. 末日聖徒イエス・キリスト教会とほかの教会の違いを際立たせている教えにどのようなものがありますか。
2. モンソン副管長はメルケゼデク神権者に関して、「召しを全力を尽くして遂行する特権は至る所に見いだすことができます。私たちはイスラエルを見守る羊飼いです」と言っています。
3. ジョセフ・スミスは「神権の召しを全力を尽くして遂行する」ということの意味をどう説明しているでしょうか。
4. 神権の誓詞と誓約には、主のすばらしい約束がなされています。それはどのようなものでしょうか。

**若**い母親だった私は夫とふたりで、息子を教会へ連れて行かなければ、と強く感じていました。私たち夫婦は宗教について話し合ったことはありませんでしたが、夫も私も神を信じていました。ですから私は、最初はあまり頻繁<sup>ひんぱん</sup>ではありませんでしたが、どの教会に行くべきか教えてくださいと祈っていました。

子供のころ、私は教会へ通っていました。私が6歳のとき、母が亡くなり、父と8人の子供が残されました。ひとりはまだわずか生後9日の赤ちゃんでした。母の死後は苦しい生活が続きましたが、私は教会に安らぎと慰めを覚えました。そこで神を愛することと祈ることを私は学んだのです。

長男が4歳になったとき、次男が生まれました。まだどの教会に行ったらよいかわからないまま、私は以前よりも頻繁に、心から祈るようになっていました。

それから1年半が過ぎ、祈りは真剣なものになりました。当時、私たちはアイオワ州ダベンポートでアパート暮らしをしていました。私は読書が好きで、家にある本は全部読んでしまっていました。廊下をはさんだ向かい側の部屋に、カリフォルニアから家族が引っ越してきたばかりだったので、私は新しい隣人とお近づきになることにしました。お向かいさんは何かおもしろい本を持っているかもしれないと思ったのです。

息子を学校へ送り出すと、すぐに私はお向かいの家を訪ねました。自己紹介をして、少し話をしてから、自分が訪ねた訳を伝えました。ところが、引っ越しのトラッ

クに本を積むだけのスペースがなく、本はやむなく置いてきたと言うのです。しかし、1冊だけ持ってきたと言っていました。それが「モルモン経」だったのです。

このお向かいさんからモルモン教徒について聞いたことがあるか尋ねられ、「歴史の授業でブリガム・ヤングが開拓者をユタへ導いたことを学んだだけよ」と答えました。続けて彼女が「歴史は好きかしら」と尋ねるので、私は「ええ、好きよ」と答えました。「それならきっとモルモン経が気に入るはずよ。モルモン経には古代アメリカ人の歴史が書かれているから。」アメリカインディアンや、彼らがどこから渡来してきたのかずっと不思議に思っていた私は、その言葉にわくわくしました。

それから彼女はジョセフ・スミスのことや、彼が金版を見つけ、翻訳した経緯について話し始めました。

私は、お向かいさんがモルモン教会の会員ではないことを知って、とても驚きました。彼女はカリフォルニアで宣教師から福音を学び、それが真実であると確信していたのですが、知恵の言葉を守れないと感じていたのです。「必ず、ジョセフ・スミスの話を最初に読んでくださいね。このモルモン経はお貸しするけれど、読み終わったら、また返してほしいんです。」

ジョセフ・スミスの物語を読みながら、私はまるで自分もその場にいるかのような気持ちになり、それらが真実であることを確信しました。お向かいさんはときどきこちらの様子を見に来ては、私がモルモン経の内容を信じていることを知って喜んでいました。

モルモン経を半分ほど読み終えたとき、我が家は引っ

## きっとモルモン経が 気に入るはずよ

チェリー・L・モロー



越すことになり、その本を返さなければならなくなりました。モルモン経を手放したくなかったのですが、お向かいさんによれば「宣教師に電話をすれば、喜んで同じ本を持って来てくれるわよ」とのことでした。

引っ越し後、宣教師に電話をすることを忘れてはいなかったのですが、そのままになっていました。「そうね、もし本当にこの教会が、真の神の教会なら、宣教師の方が私を見つけてくれるはずだわ。」そう自分に言い聞かせるようになっていました。

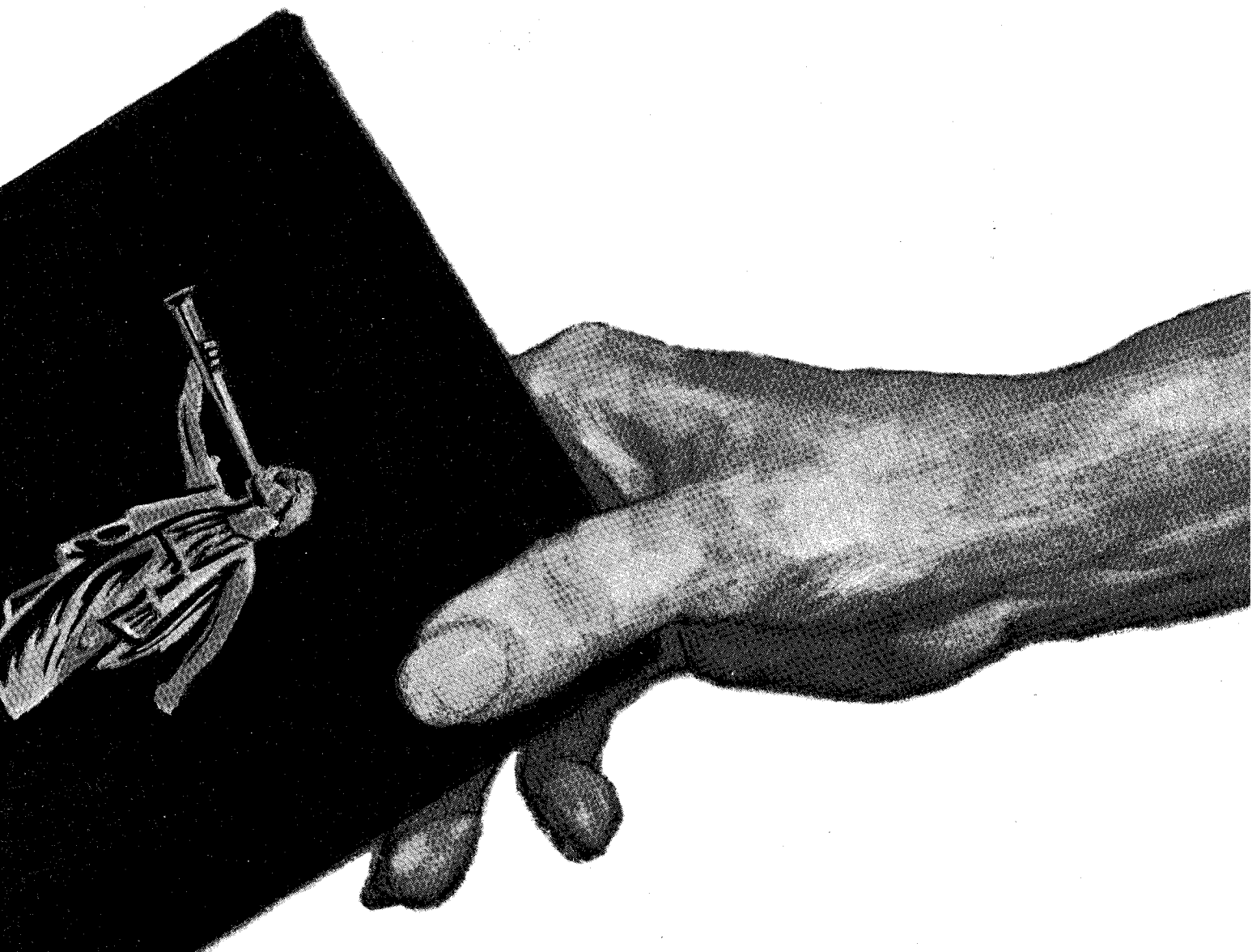
ある朝のこと、息子に登校の準備をさせていたとき、私はいらついて思わず怒鳴り声を張り上げてしまいました。これまで一度もそんなことをしたことがありません。すぐに謝りましたが、息子の目には、傷ついた様子がまぎまぎとうかがえました。息子が首をうなだれて歩道を歩いて行くのを、私はじっと窓越しに見ていました。息子は日ごろはとても明るい子なのです。私は不安になり、泣きながらひざまずいて、天父に赦しを請いました。かなり長い間祈った後、モルモン経が真実かどうか、またこの教会が真実の教会かどうかを、どうか何らかの方法で教えてくださいと、私は改めて神に願い求めました。

その日の朝10時ごろ、ドアをノックする音がしました。ドアを開けると、スーツに身を包んだふたりの青年が立っていました。「末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師です」と言います。私はふたりを中に招き入れました。やがてふたりは、こんな話をしてくれました。その日の朝、真理を求めている人のところへ導かれるように祈っていると、この地域へ来るように靈感を受けたということです。ところが、この地域は以前に何度もチラシを配っていたので、最初は間違いではないかと思って引き返しました。それでも、ふたりして戻るようにと導きを受けたので、また戻ってきたのだそうです。

それから2週間ほどして、私はバプテスマを受けました。18年後に、夫もバプテスマを受けました。夫は支部長会で働き、私たちは神殿で結び固められました。

私はモルモン経に感謝しています。そして、宣教師にも感謝しています。宣教師はみたまの声に従い、彼らの訪問を祈り求めていたひとりの人間を、探し当ててくれたのですから。□

\*チェリー・L・モロー：アイオワ州デモインステーキ部ノックスビル支部所属。



# 私たちはとても 祝福されています

ベニグノ・パントハ

チリのプンティアグド山脈の東にある  
人里離れたエルカヤオ溪谷に、  
特別な末日聖徒の一家が住んでいます。

**初**めてホセ・イエフィー兄弟と妻のファナ姉妹、それに7人の子供たちのことを聞いたのは、フリオ・オータイステキ部長と共に私が地区代表としてチリのプエルトモントステキ部を訪ねたときのことでした。イエフィー家族と教会における彼らの経験をオータイステキ部長から聞いて、私はこの家族に会いたいと思いました。家族はエスタシオンワード部の会員ですが、家はプエルトバラスにある集会所から歩いてすぐというわけにはいかず、とてもやっかいです。バスとボートと馬に乗るとい、言わば3部立ての冒険旅行をするようなものなのです。オータイステキ部長と私は、チリの祝日に当たる9月17日から18日にかけて出かけることにしました。

私たちがプエルトバラスを出発したときは、その地方に春の訪れを感じさせるようなよく晴れた朝でした。旅行の前半は、トドロスサントス湖岸のペトロウエまで90分間バスに揺られる旅です。バスは雄大な円すい形のオソルノ火山を背後に控えたヤンキーウエ湖岸の南側を回って行きました。トドロスサントス湖では、定期便の船を利用して渡る予定でしたが、前の便が観光客を乗せてすでに出航してしまったことを知らされました。それで3時間かかる湖横断のために、貸しボートを借りたところ、偶然にもそれはイエフィー兄弟のいとこのボートだったのです。たっぷり

ホセ・イエフィー兄弟（左からふたり目）の自宅に向かう途中、筆者ベニグノ・パントハ地区代表（左端）とフリオ・オータイステキ部長（右端）はミランダ家族に出会った。イエフィー兄弟の家はここからさらに、馬に乗って2時間の場所にある。ミランダ家族はイエフィー兄弟の伝道活動を通して教会員になった。













3時間、私たちは周りの自然の美しさを満喫しました。湖は、太陽の光に照り輝くその湖面の色から「エメラルド湖」としても知られており、右手には壮大なモンテトロナドール山脈がそびえ立っています。それは国民の祝日を祝う格好の過ごし方でした。私はこのような美しい国に生まれたことを天父に感謝せずにはられませんでした。

イエフィー兄弟と待ち合わせていた岬に着いてみると、彼はそこにはいませんでした。彼は、対岸の観光客を乗せた船が入る棧橋で、私たちを待っていたのです。イエフィー兄弟が自家用ボートでこちらに渡って来る間を利用して、私たちは付近に住むミランダ家族を訪問することにしました。ホセ・ミランダ兄弟はイエフィー兄弟の義理の兄弟で、家族が教会に改宗したのもイエフィー家の伝道のおかげだったのです。ミランダ家族についてはあとで紹介したいと思っています。

さて、イエフィー兄弟がようやく到着しました。誠実そうな笑顔と輝く目をした、見るからにレーマン人の子孫とわかるこの兄弟に直面するや否や、私は親近感を覚えました。

私たちはイエフィー家を目指し、最後のコースである月桂樹げつけいじゆやこの付近特有の樹木が生い茂る森林を、2時間の間、馬に乗って抜けていきました。馬に乗っている間、湖に注ぐシンノブレ川(原語で「名無し川」の意)が奏でるせせらぎの音が聞こえていました。

ついにイエフィー家族の住む、まったくの人里離れたエルカヤオ溪谷に到着しました。馬から降りると、子供たちが歓声を上げて出迎えてくれました。最初私は、訪問客があることをうれしく思っているのかと思いました。しかし、すぐに子供たちの興奮が父親のためであることに気づきました。子供たちはまるで長いこと会っていませんだったかのようにイエフィー兄弟に抱きついていました。私は、子供たちと父親との間に特別なきずなを感じました。後になって、イエフィー兄弟が7人の子供のうち5人までみずからの手で取り上げたことを知らされました。

木で作られたイエフィー家の家の周りにはたくさんの黄色い花が咲き乱れ、この高地の溪谷にも春が訪れていました。

家の中には、「目標——永遠の家族を築く」というポス

バント八長老はこう語る。「2時間の旅を終えて馬を降りると、子供たちが歓声を上げて迎えてくれました。最初、私たちは、訪問者を見て子供たちが大喜びしているのかと思いました。実は彼らの父親のためだったのです。」

ターが居間に掲げてありました。その夜イエフィー家族と雑談を交わしているうちに、福音に根ざした彼らの信仰の源を私は知りました。

イエフィー兄弟は教会を知ったいきさつを、次のように話してくれました。

「私は子供のときから、鼻血に悩まされてきました。結婚してからあるとき、とてもひどい出血をして気を失い、幻覚におそわれたんです。意識を取り戻してからも、私は来世に来たのかと思ったほどです。しかし、傍らで妻が看病してくれているのを見て、ほっとしました。

私はプエルトバラスにいる医者に診てもらおうと思いました。友人の家に行ったとき、彼は、主のみ名によって人々を『癒す』という近所のふたりの青年のことを教えてくださいました。私は根っから信心深い人間ですから、彼らに会って、祝福の料金を尋ねたんですよ。彼らはいつもワイシャツ姿ですからすぐわかるんですが、その青年たちはこう言いました。『私たちは自分の兄弟を祝福するのにお金をいただいたりしません。もしあなたに、私たちの施す祝福で癒されるという信仰があるなら、実際にあなたを癒してくださるのは主なのです。』

彼らは私に座るように勧めたんですが、私はこう言ったのです。『座ると気持ちが落ち着かないんで、ひざまずいた方がいいんですが。』宣教師たちは私の頭に手を置いて祝福してくれました。ところが、びっくりするようなことが起きたんです。私は全身に温かいものを感じ、神様の力によって癒されているんだということがはっきりとわかりました。それからというもの、一度も鼻血が出たことがないのです。

このことがあってから、私は宣教師たちに教会の会員になるにはどうすればいいのか尋ねました。すると私に結婚しているかどうか宣教師が尋ねるので、結婚していると答えました。私たちは次の日曜日に妻と一緒に会う約束をしました。宣教師たちは最初のレッスンを終えると、次の週に2回目のレッスンをしてもよいかと私たちに尋ねました。しかし、ここまで来るのは遠いので、私はそのときにバプテスマも施してほしいと言ったんです。私たちは全部のレッスンを受けて、その日、1979年9月28日にバプテスマを受けました。

我が家から教会は遠く離れているんですが、できるだけ日曜日の集会に出席しました。ある日曜日に私は、支部長からアロン神権を授かるための面接を受けたんです。」

当時イエフィー兄弟の支部長であったオータイ兄弟は、什分の一を納め、メルケゼデク神権を受ける準備をするよう彼にチャレンジしました。この面接があつてから2、3カ月後の、雨のそば降る日のことでした。イエフィー兄弟が姿を現わし、最初の什分の一を納めたいので支部長と話したいと言ってきたのです。オータイ支部長は部

屋に入るように勧めましたが、イエフィー兄弟は、什分の一は外に置いてあると言うのです。それは、ジャガイモが詰まった3つの袋でした。

主の戒めを守ることに對する、この兄弟の忠実さを考えてみてください。彼はジャガイモの袋3つを、馬とボートとバスと、最後に荷馬車を使って教会まで運んだのです。

什分の一の律法に對するイエフィー兄弟の証を聞くのは、すばらしい経験です。「什分の一を持って監督のところへ行く前に、私は家で、正直でいられるように天父に祈ります。天父の持ち物をかすめているという気持ちを持ちたくないんです。」

イエフィー兄弟は、什分の一の律法を守ることで、家族は主から多くの祝福をいただいていると証しました。彼によれば、バプテスマを受けた当初は、畑を耕すための牛2頭、馬1頭、山羊と羊が数匹という、家族を養うために最低限必要なものしかなかった、と言います。しかし、彼は非常に敬虔な態度で次のように語ります。福音を学び、什分の一を納めるようになってから、「私たちはとても祝福されています。馬も山羊も羊もいます。乳牛は9頭にも増えて、子供たちに飲ませる牛乳が十分に取れるだけでなく、チーズにして売れる分まであります。小麦だって自給自足できています。私たちはとても祝福されているのです。」

永遠の家族を築くという目標の一部として、イエフィー一家族は親戚に熱心に福音を紹介しています。イエフィー兄弟の父親ブルーデンシオ・イエフィー・カルブカン兄弟は、親戚中で彼から福音を聞いた最初の人でした。次に彼の兄弟のセイグンド・ブルーデンシオ・イエフィー・アギーラー兄弟と妻のマリア・イザベル・デ・イエフィー姉妹、そしてその娘のひとりが興味を持ち始めました。それから私たちが湖岸で会った彼の義理の兄弟ホセ・ノルベルト・ミランダ・ディアス兄弟とその妻マリア・フランシスカ・デ・ミランダ姉妹、長男のファン・エリベルト・ミランダ・イエフィーとその妹ふたりがもっと学びたいと言い出しました。

イエフィー兄弟は彼らに宣教師のレッスンを全部自分で教え、それから親戚の人々はプエルトバラスまで行って、専任宣教師から面接を受けました。面接の後、イエフィー兄弟がバプテスマを施しました。また、すでに自分と妻が受けている神殿のエンダウメントも受けるよう彼らにチャレンジをしました。(私たちが訪問したとき、ミランダ家の長男はチリのビーニャデルマール伝道部で伝道中でした)

訪問の2日目の日曜日に、オータイステキ部長は、イエフィー一家が監督に什分の一を納めるためにプエルトバラスに行くとき以外は、自宅で教会の定例集会を開けるように、イエフィー兄弟に許可を与えました。

私たちは、イエフィー家族とその親戚、合わせて18人の会員と共に日曜学校と聖餐会に出席しました。イエフィー兄弟はモロナイ書を使ってレッスンを教えました。バプテスマ、フェローシップ、聖霊の力によって道を説くことについて書かれた6章と7章をイエフィー兄弟が読むと、私たちのほおを涙が伝わっていました。

レッスンが終わると、全員で賛美歌を歌いました。ピアノも音楽の知識さえありませんでしたが、イエフィー一家族は、外れた音も気にならないほど心を込めて歌ったのです。それからイエフィー兄弟は、私たち訪問者に話をするように依頼してきました。

私の話す番が来たとき、私は彼らに言いました。「皆さんは私が話すことは何でも熱心に吸収しようとしている様子ですが、皆さんが私から学ぶよりももっと多くのことを、この訪問を通して私は皆さんから学びました。」その日の晩にイエフィー家族に別れを告げてから、私は彼らから学んだ教訓について思いを巡らせました。どのような状況にあっても主に忠実であることを学んだのです。イエフィー家族と教会堂とは非常に遠い距離にあります。彼らと主の間には距離がないということを知りました。周りに何十人もの隣人がいても、私たちの多くは福音を分かち合っていないませんが、イエフィー家族が一番近くにいる隣人や親戚を教えて、フェローシップし、バプテスマを施したのです。

神殿を最優先させることもイエフィー家族から学びました。私たちの多くは、比較的神殿に楽に行けるにもかかわらず、次々と口実を設けては神殿参入から遠ざかっています。イエフィー家族はすでにサンチアゴまでの長い道のりを旅して、神殿で結び固めを受けました。以来、所用でサンチアゴへ行くときは、まず神殿に参入することを最優先しています。

私はこの美しいエルカヤオ溪谷が私の福音に對する証と主に従う決心を強めてくれたことを感じました。イエフィー家族のよい影響は、山あいの人里離れた場所を越えて、多くの人々に伝わっています。□

\*ベニグノ・パントハ：サンチアゴ、ラ・フロリダステキ部ラ・フロリダ第2ワード部の会員。教会のチリ南部地区の地区代表を務めている。

教会堂が自宅からあまりにも離れているため、イエフィー兄弟と妻のファナ姉妹は、家庭で教会の集会を開く許可をステキ部長から得た。イエフィー一家族の大勢の親戚もバプテスマを受けて、イエフィー家の集会に出席している。







マトゥルーレ家族にとって、レーク長老とレーク姉妹は、偉大な奇跡を行なわれる主のみ手により遣わされた器だったのです。レーク夫妻にとってもユタの家を出る前に、はるかなジンバブエの地でこのような意義のある経験ができるとは想像もしないことでした。





良いものをさらに良いものに換えるために

# 夫婦宣教師

十二使徒定員会会員  
M・ラッセル・バラード



奉仕できるすべての夫婦の皆さん、今がその時です。勢力を  
尽くし、思いを尽くし、体力を尽くして鎌を入れてください。

つい最近、私はジンバブエのサバス・シバンダ・マトゥルーレという  
男性が経験したことについて耳にしました。シュールグエ(彼の  
表現によると、ごく普通のアフリカの小屋だそうです)で生まれた彼は11  
人兄弟の7番目でした。

3人の姉妹と同じように、彼も生まれたときから足が不自由でした。小  
さいとき、自分の体が不自由なことで主を恨み、両親が熱心に通っていた  
キリスト教会に出席することを拒みました。

7歳のとき、彼は姉妹たちと一緒に家から遠く離れた身体障害者の学校  
へ入ることになりました。年に1度しかお母さんに会えない寂しさは、耐  
え難く思われました。「人生は過酷で、希望など何にもありませんでした」  
と、そのころを思い起こしています。

さらに、彼にとってはたったふたりの友達である母親ともうひとりの身  
体の不自由な学友が死んだとき、彼のつらさは一層募りました。「私には、  
本当に何も残されていませんでした。一筋の希望の光さえ、どこにも見  
だせなかったのです。人生はただむなしく、神はまったく不公平で、私が  
礼拝する価値も、敬意を払うべき理由もありませんでした。」

しかし、聖書を読むようにと熱心に勧めてくれた何人かのクリスチャン  
と親しく交わるようになってから、彼の気持ちは和らいでいきました。数  
年過ぎ、仕事を見つけ、結婚し、ふたりの娘が生まれました。

1985年7月、謙虚でやさしく正直そうな男の人が奥さんと共に家を訪ね  
てきて、ボイド・レーク長老であると自己紹介しました。レーク長老とレ  
ーク姉妹は、ユタ州オークリーから来た夫婦の宣教師で、彼の妻スーザン  
に仕事場で会い、夫を訪ねるよう頼まれたのです。

「キリストに関することは何でも、私たちの生活を明るくしてくれます」  
とサバスは語ります。「それで私は、レーク兄弟姉妹を家に喜んで迎えました。」

宣教師のメッセージは大変すばらしかったので、マトゥルーレ夫妻はさ  
っそく、自分たちが働いている身障者センターの友達皆を紹介するために、  
レーク兄弟姉妹を招きました。それからサバスとスーザンは、モルモン経  
を勉強し始めました。

ふたりの宣教師が何度か訪問するようになったころ、サバスは病気になりました。けれども、神権による祝福のおかげで元気を取り戻しました。こうして神権の力に感動し、また、家庭の夕べ、断食献金、什分の一、貞節について学んだことにも深い感銘を受けました。「私はまた、永遠の家族について学びました。もし私たちが信仰あつくふさわしければ、神殿結婚ができ、夫婦や家族が永遠に結び固められるのです。」

1986年8月2日、サバスは、支部長からバプテスマを受けました。また、レーク長老はスーザンと、娘のひとりにバプテスマを施しました。「末日聖徒イエス・キリスト教会の会員になってから、私たちの家庭はなんと喜びに満たされたことでしょう。この教会は主ご自身が回復されたのです。」3週間後、3番目の娘のヘレン・ハッピーネスが生まれました。ヘレンという名前は、レーク姉妹の名前をもらって名付けました。

マツルレー家族にとって、レーク長老とレーク姉妹は、偉大な奇跡を行なわれる主のみ手により遣わされた器だったのです。レーク長老、姉妹にとってもユタの家を出る前には、はるか遠くのジンバブエでこのような意義のある経験をすると想像もできないことでした。

夫婦宣教師は世界中で、このようなすばらしい祝福を大勢の人々の生活にもたらしています。そして、宣教師が奉仕し、心を尽くして仕えた人々にもたらされるのと同じ祝福が、宣教師自身にも与えられるのです。

私がカナダのトロント伝道部で伝道部長をしていたとき、伝道部内で奉仕する夫婦宣教師たちが変わっていく姿に驚きました。そのほとんどは退職後に予定していた快適な暮らしを犠牲にして伝道に出ます。

それから美しい変革が始まるのです。主への信仰と信頼に満ち、無私の精神で伝道に打ち込む姿を見ると、あたかもつぼみが花開くのを見るような気がします。このようなすばらしい夫婦は故郷の地で身に付けた良いものを伝道地の人々に与え、伝道地でさらに良いものを身に付けて帰っていくのです。

たとえばヴァール・エイシー兄弟姉妹の経験について考えてみましょう。彼らは私たちと一緒にトロント伝道部で奉仕してから、今、3番目の伝道地のロンドン南伝道部で働いています。

「伝道の仕事について、ほかの夫婦に説明するとしたら、何と言われますか」と尋ねると、エイシー兄弟は次のような励ましの言葉を語りました。

「主はもし私たちが熱心に奉仕しようとするなら、天の窓を開いてくださいます。(マラキ3:10参照)私は初めて召される前には病気がちで、長期間仕事を休んで家にいなければならない時期がありました。それにもかかわらず、伝道の召しを受けられるほど健康になり、アメリカ北西部で教会堂建築の監督をして2年間過ごしまし

た。幸せなことに伝道中は健康に恵まれました。

家に帰ってから、私たちはまたトロント伝道部で1年半伝道するようにという召しを受けました。それはこの上なく、霊的な報いのある経験でした。私たちは世界で最もすばらしく、親切で、愛すべき人々と会い、共に働いたのです。かつて経験したこともない寒い冬でしたが、私は再び健康に恵まれました。主は本当に、私たちを祝福してくださいました。故郷の家族は、私たちの手紙と一緒に読むことによって、一層強く一致するようになりました。また、家族に対する私たちの愛は幾倍にも増したのです。

家に帰ると私たちは、この1年半の間に得られた非常





にたくさんの祝福を数えあげてみました。健康。家族の結びつきが強くなったこと。福音を通して結ばれた大勢の兄弟姉妹との出会い。そして主のぶどう園の片隅で、み業を推し進めるため少しでも手助けをしたときに得た、数え切れないほどの霊的な経験。

今、再び、私たちは新しい召しをいただき、感謝しています。今度はイギリスです。世の人々が主の再臨に備える手助けをするために、もっとたくさんの夫婦が必要なのです。」

私はこの夫婦がイギリスですばらしい働きをなさると確信しています。エイシー兄弟姉妹がカナダ伝道部へ来た日、私は初めて面接をしました。そのときエイシー姉

妹は、宣教師になることに不安を感じていた様子でしたので、私はこう言いました。「伝道はそれほどむずかしくはありません。ただ人々に教会について話せばいいのですよ。」

そして、私たちは実際に黄金の質問をして練習したのです。

ふたりが宣教師として、初めて出かけた日のことです。エイシー兄弟が食料品の代金を払っている間に、姉妹はレジにいる女性に尋ねました。「末日聖徒イエス・キリスト教会について何かご存じですか。もっと知りたいとお思いになりませんか。」

この質問をきっかけとして、この女性、ベティ・ギルダは、夫とふたりの親戚と共にバプテスマを受けました。そしてさらに、少なくとも17人が後に続いたのです。

私はこの夫婦が主に仕えるために3回も、家族と心地よい家庭生活とを後にしたことを考えるとき、主の次の言葉を思い出します。「おおよそ、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、もしくは畑を捨てた者は、その幾倍もを受け、また永遠の生命を受けつぐであろう。」(マタイ19:29)

次にあげるのは、よく尋ねられる質問です。その答えは多分、夫婦宣教師の仕事を、もっとよく理解する助けになるでしょう。

夫婦宣教師にはどのような人たちがなれるのですか 家に扶養すべき子供のいない、年配のふさわしい夫婦で、健康であり、経済的に自立して伝道生活を営める人たちです。

どのくらいの期間、奉仕するのでしょうか 普通、1年半召されます。しかし状況によっては、1年とか、半年間だけ召されることもあります。半年というのは、たとえば農業のような仕事に携わっている場合で、ある季節に限り召しに応じられる夫婦に限られます。このような短期間の場合は、居住地に近い伝道部で働くようになります。1年半働く夫婦は、外国で伝道することもあるでしょう。

一度伝道を終えた夫婦は、また伝道したいと望むことがよくあります。ラルフ・テイト、アイリーン・テイト夫妻は、4度目の伝道をしています。初めはトロント、2度目はナイジェリアとアイルランドの双方で伝道し、3度目はカリブ海の島々でした。そして現在、ニュージーランドで主のみ業に奉仕しています。彼らは、それぞれの伝道地で人々がバプテスマを受けるのを見てきました。そして、指導者の訓練に非常に大きな役割を果たしました。

宣教師の召しを自分から求めるのは厚かましいでしょうか そんなことはありません。だれでもみずから宣教師に召すことはできません。主が召されるのです。しかし、監督のところに行って、伝道に関心を持っている

ふたりが宣教師として初めて出かけた日、エイシー姉妹は、レジの女性に教会について何か知っているかと尋ねました。これをきっかけにして、レジにいた女性は、夫とふたりの親戚と共にバプテスマを受けました。さらに、少なくとも17人がそれに続いてバプテスマを受けたのです。



ことを知らせるのはいつでもできます。

レッスンプランを暗記しなければならないのでしょうか 現在のレッスンプランを使っている宣教師たちは暗記するように求められていません。概要を把握し、自分たちの言葉で教えます。レッスンプランの概要だけを覚えることは決してむずかしいことではありません。少し見ながら教えてもよいのです。そうすれば無理に覚えなくても、より効果的に福音を教えることができるのです。このような方法で、みたまと求道者の気持ちにもっと敏感になることができます。でもこの問題に関して、心配するには及びません。あなたはすでに福音を知っているのです。長年福音を学び、実践してきたあなたはすばらしい個人的な体験がたくさんあるはずで、それらを通して、効果的に福音を教えられます。何も恐れることはありません。主はあなたが伝道地で福音を伝えるとき、あなたを祝福してくださるでしょう。

夫婦宣教師に、年齢制限はありますか 普通は70歳までです。しかしながら70歳以上の夫婦で、もし健康で、身体的にも情緒的にも奉仕する力があるとステーク部長が判断すれば、召されることがあります。

健康状態は一般的にどうあるべきですか 夫婦宣教師は、伝道の仕事ができるように健康であるべきです。ほとんどの夫婦は、家庭にあっても忙しく、いろいろなことをしています。その程度の健康状態であれば伝道に出ることができます。覚えていてください。夫婦は互いに支え合うのです。その上、伝道部長は特別な事情を考慮し、あなたの経験と伝道地での必要に応じて、任命するでしょう。

若い宣教師たちと同じように厳しい肉体的な条件に耐えて伝道することができるのでしょうか このことについては、心配するには及びません。自分のペースで働けばよいのです。ほかの宣教師と同じ日程をこなす必要はありません。彼らと一緒に働き、友達になるには、ほかにもいろいろな方法があります。長い生涯を通して積み重ねてきた経験が大いに役立つことでしょう。奉仕する方法はいくらでも考えられます。

伝道に奉仕するそのほかの方法にはどのようなものがありますか 補助組織で教えるのもひとつの方法です。また、鶏小屋を建てたり、地元の指導者を訓練したり、果物や野菜の保存の仕方を教えることもできます。そのほかにも、次のような方法があります。新しい会員や、教会に興味を持っている人たちのフェローシップ、垣根の修理、お休み会員の再活発化、植物の植え方や庭の手入れの仕方を教える、福音を説く、人々の話に耳を傾け、愛を示す、聖歌隊で歌う、ペンキを塗る、バプテスマを施す、草取り。要するに、愛と信仰を持って人々の心に近づくことができるような方法なら、どんな方法でもよいのです。いくらでもあげることができるでしょう。夫

婦宣教師は、天父の子供たちを主とその王国に導くのを助けるため、あらゆることを成し遂げるよう聖霊に導かれるのです。

夫婦宣教師としての一番重要な資質は何でしょうか 夫婦宣教師はしばしば、ふたりの経験や円熟した人格、助言から、教会の指導者や会員たちが恩恵を受けることができるような地区に任命されます。ただふたりがそこにいるだけで、支部やワード部に力が増し加えられるのです。私の同僚のひとりはこのように述べています。「夫婦宣教師は、教会が人々のために何をすべきか、その生きた手本です。伝道地の人々は彼らの姿に生きた信仰を見るのです。そして自分の生涯をかけて教会に奉仕するとはどのようなことかを学ぶのです。」

何組の夫婦が必要なのでしょう か ある人がスペンサー・W・キンボール大管長にこの質問をすると、大管長は答えました。「全部の夫婦です。」

エズラ・タフト・ベンソン大管長はこのように述べています。





「教会が今日ほど宣教師を必要としている時はありません。私たちは、イエス・キリストの福音をあらゆる国民に宣べ伝えるように求められています。

この業を達成するには、現在全世界で伝道の業に携わっている宣教師の総数を大きく上回る数の宣教師が必要です。

皆さんは今、かつてないほどに求められています。『収穫は多いが、働き人が少ない。』（ルカ10：2）（『福音を全世界に宣べ伝える使命』「聖徒の道」1984年7月号、p.80）

十二使徒定員会会員のデビッド・B・ヘイト長老は次のように述べています。

「またステーク部によっては、伝道の召しを受けるに十分な備えのできている年輩の夫婦が非常に多いところもあります。彼らは福音を伝えるうえで大きな助けとなるだけでなく、非常な勢いで教会員が増えている地域の新会員を強めることにも力を注ぐことができます。今くつろいだ気持ちで座っている人々は、教会に慣れずに不安な気持ちでいるバプテスマを受けたばかりの多くの新会員を励まし訓練を施してください。私たちは何百人という信仰深い、備えのできた夫婦を、生涯で最良の経験を得る場所へ送り出せたらと考えています。」（『私の羊を養いなさい』「聖徒の道」1979年10月号、p.85）

どこの伝道部でも、もっと大勢の夫婦宣教師を必要としています。円熟した人格と豊富な人生経験が、最も優れた宣教師を生み出すことがあるのです。忠実な奉仕の生涯を通して培い、身に付けてきた特別な技能のゆえに、地元の指導者たちを効果的に訓練することができます。また会員たちを強め、再活発化し、会員ではない人を教え、バプテスマを施すことによりキリストのみもとへ連れてくることのできるのです。

このような仕事の重要性は、とても言葉では言い表わすことができません。

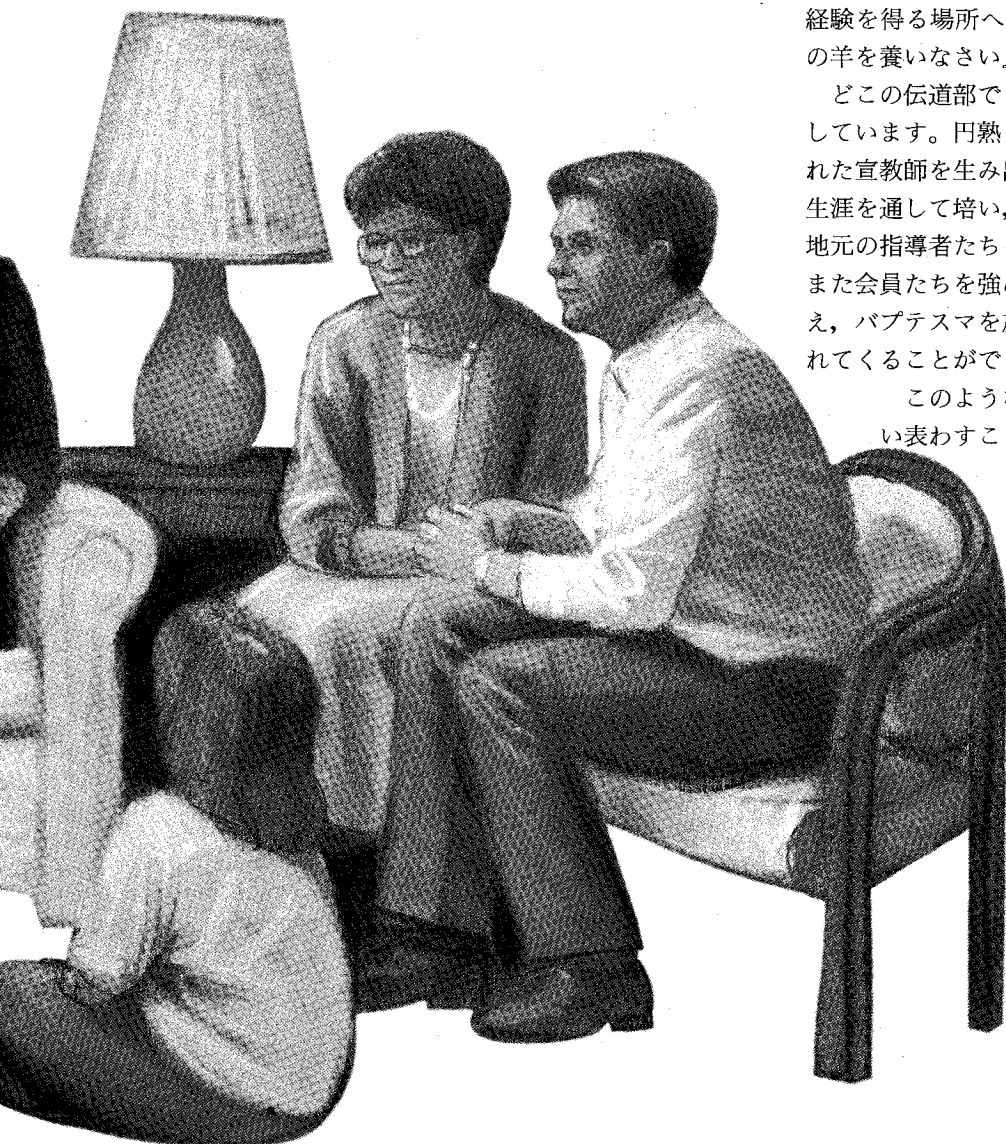
奉仕できるすべての夫婦の皆さん、今がまさにその時です。

勢力を尽くし、思いを尽くし、体力を尽くして鎌を入れてください。（教義と聖約4：2参照）そうすれば、信じられないくらい多くの愛をさらに受け、多くのことを達成することでしょう。

伝道は、犠牲です。けれどもその犠牲は、「天の恵み」をもたらします。（賛美歌16番『たたえよ、主の召したまいし』参照）

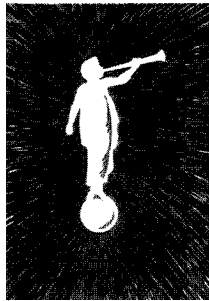
家庭や家族、安楽を犠牲にするのは、まさに何か良いものを犠牲にして、さらにすばらしいものを得ることになるのです。□

どこの伝道部でも、もっと大勢の夫婦宣教師を必要としています。円熟した人格や豊富な人生経験、忠実な奉仕の生涯を通して培われた特別な技能が、最も優れた宣教師を生み出すことがあるのです。



すべての会員は宣教師である

## 福音を分かち合うための 簡単な方法



1. まず自分自身でよく福音を勉強してください。祈り、みたまを求め、教会に対する証と知識を深めてください。このようにして福音を分かち合うための備えができます。

2. 友人をつくってください。友人を心から愛し、良い友達になってください。いろいろな活動に参加して、いろいろな人と接する機会をつくるようにします。

3. 友人を教会の活動に誘ってください。温かな親しみやすい雰囲気が生まれるように、前もってよく計画しておきます。

4. 教会に関する質問に率直に、快く答えてください。あなたに備えがあれば、何も問題はないはずです。心からの関心をもって正確に答えてください。

5. 新しい友人や知り合いになった人々に渡したり、貸したりするモルモン経を、余分に用意しておいてください。

6. 日曜学校、扶助協会、神権会のクラスやテキストで学んだ興味深い事柄を、友人との話題に採り上げてください。

7. 家族の歴史を作成するために収集した資料を見せたり、それについて話したりしてください。系図探求の楽しさを伝え、彼らが実際に探求を始めるよう手助けをします。

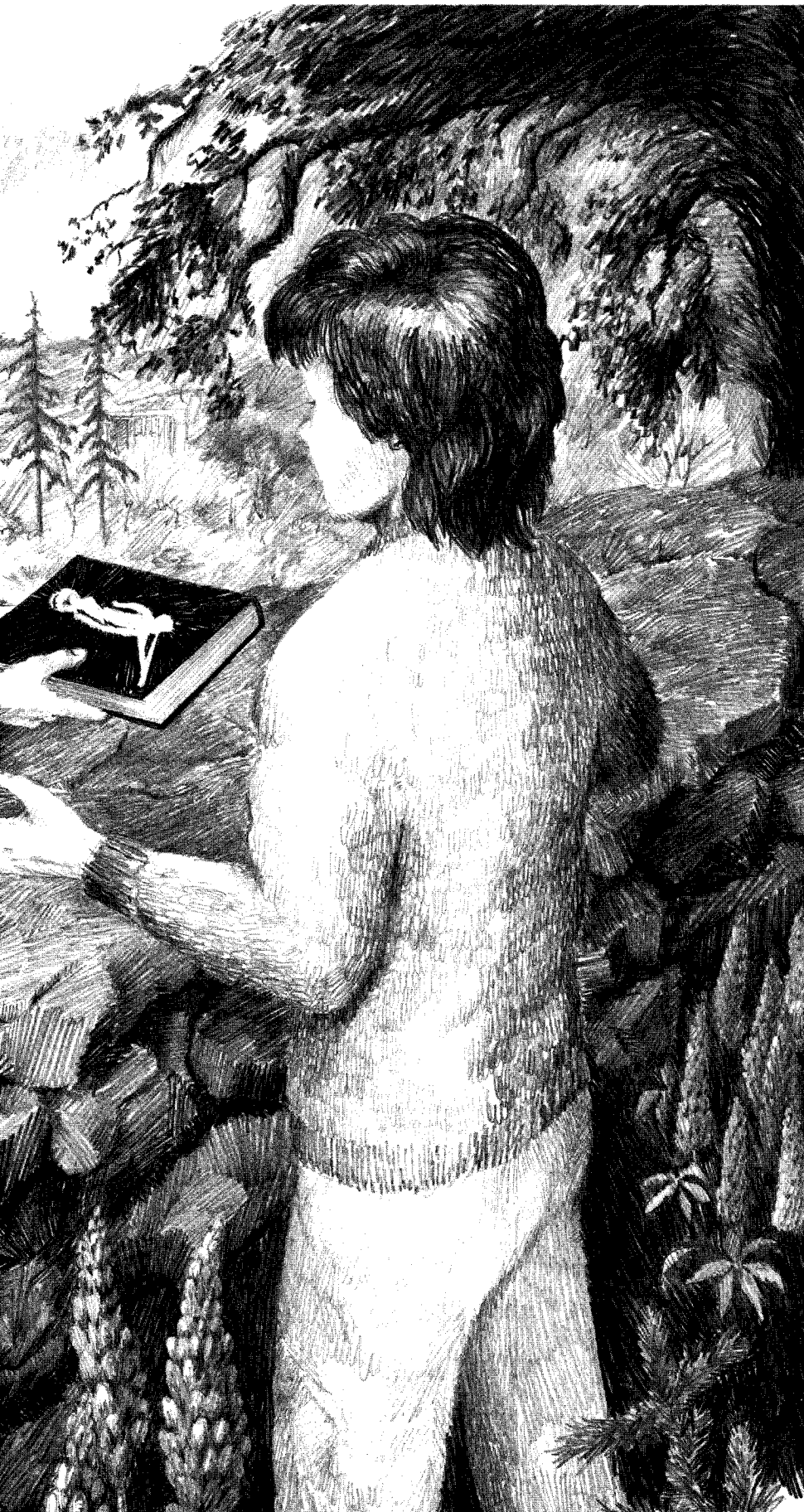
8. 霊的高揚の機会となる教会の集會に友人を誘ってください。そこで経験する温かなすばらしい気持ち、みたまによってもたらされるものであることを彼らに教えてあげてください。

9. 証を伝えるにふさわしい時と場所を見つけてください。あなたにとって福音がどれほど意義深いものか、また友人があなたにとってどれほど大切であるかを伝えます。専任宣教師からレッスンを受けてみるよう勧めてください。

10. 友人が興味を示さなくても落胆しないでください。とにかく彼らの良







ちょっとした工夫で福音を分かち合うことができます。たとえば、モルモン経を余分に手元に置いておけば、機会あるごとにそれを手渡すことができます。

き友人でい続けることです。改宗させる目的だけで関心を示しているとしたら、それは相手を傷つけてしまうだけです。友人にとって福音を受け入れる準備の整うときがいつか来るはずです。そのとき、あなたとの交際や教会での体験が良い印象となって残っているでしょう。

11. 友人が教会に行けるように助けてあげてください。必要に応じて車などの手配をします。教会で行なわれる行事の予定を必ず知らせ、だれかが必ずそばに座るようにしてください。

12. 「聖徒の道」を予約してプレゼントするか、手元の「聖徒の道」にある記事を紹介してあげてください。

13. 常に良い模範を示してください。友人たちは、あなたが標準に添った生活をしているか見ているはずですよ。

14. 決してあきらめないでください。たとえ1,000人に断われても、続けるだけの価値があるのです。ひとりの友人が福音を受け入れてくれたときの喜びは、計り知れないものだからです。

## 奉仕を通して主を覚える

「あなたがたによく言うておく。わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである。」(マタイ25：40)

**あ**る寒い冬の日の朝早く、ミスケ家族は隣人たちの声で目を覚ましました。その隣人とは、近くにある老人療養施設にいる16人の患者でした。水道のポンプが壊れて水が使えなくなり、ミスケ家に助けを求めてきたのでした。ミスケ家の人々は一日中、自分の家の井戸から水をくみ上げました。しかし、夕方にはその井戸の水もかれてしまいました。それからミスケ姉妹は水を入れるための4リットルの容器を18個購入し、ほかの末日聖徒に助けを求めました。彼らはさらに大きな容器を16個集め、教会でそれに水を満たしました。3人の姉妹が患者たちの衣類などの洗濯をしました。またある姉妹はシーツの洗濯とその乾燥を9時間かけて手伝いました。

ミスケ姉妹は雪が降って温度計がしばしば氷点下を示す寒空の中で、3日間で合計1トン以上もの水を運びました。4日目ようやく新しいポンプが設置され、事態はようやく平常のとおりになりました。

しかしミスケ家族にとっては平常の事態とは言えませんでした。自分の家の井戸はかれたままの状態だったので、しかし今度は療養所の職員が喜んでミスケ家族を助けてくれました。そして井戸に再び水がわいてくるまで、手を差し伸べてくれたのです。

救い主は地上におられたときに、心を尽くして神を愛し、自分自身を愛するように隣人を愛せよと教えられました。(マタイ22：36—39参照)キリスト



どれほどの規模で行なわれるかにかかわらず、私たちは奉仕を通して、人々に仕え、人を愛する力を増し加えていくことができます。

にならって奉仕することは、このふたつの大切な戒めに従うという点において、欠かすことのできない重要な要素です。

しかし人のために働く機会が、自分に都合のよいときに来るということはめったにありません。確かに、十分な時間があるときに、割り当てとして予定どおりに行なうことのできる奉仕もあります。しかし、私たちが行なう奉仕の多くは思わぬときに自然発生的に来るものであり、急いで対応しなければならぬものも数多くあります。そして、ときには継続的に注意を向けなければならない事柄もあります。

私たちが行なう奉仕は、大規模である必要もなければ、熱狂的なものである必要もありません。私たちは、家族、

友人、隣人、職場の同僚、あるいは初対面の人などの触れ合いの中でも、日々、天父のすべての子供に対する愛と思いやりを示すことができます。

主はまた弟子たちに「互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい」と命じられたことがあります。(ヨハネ13：34—35。ヨハネ15：12—17；IIヨハネ1：5；教義と聖約88：123；モーセ7：33参照)主はご自身がなされたのと同じように、愛し、仕え合うことを私たちに望んでおられるのです。(モーサヤ2：17—18参照)その奉仕がどれほどの規模で行なわれるかにかかわらず、私たちはそれを通して、人々に仕え、人を愛する力を増し加えていくことができます。

奉仕についてゴードン・B・ヒンクレー副管長は次のように述べています。「私たち教会員が特にしっかり認識しておかなければならないのは、自己犠牲なくして真のキリスト礼拝はあり得ないということです。……そのようにほかの人々のために尽くすならば、私たちの人生は幸福と喜びに満ちたものとなるでしょう。そして、さらに大切なのは、私たちの人生が救い主イエス・キリストと、すべての隣人の祝福のために捧げられるようになることです。」(『主のみ業に献身する』『聖徒の道』1987年8月号、pp.2—6参照)□

### 訪問教師への提案

1. 愛と奉仕の精神をはぐくむうえで妨げとなるものについて考える。それを克服するにはどうしたらよいかについて話し合う。
2. 無私の奉仕が自分あるいはほかの人の生活を変えたという経験について話し合う。





# 福音を分かち合う

アジア地域会長会第二副会長

マーリン・R・リバート

**福**音を人々に伝える責任はすべての会員に与えられています、それは喜びに満ちた教会員の義務のひとつです。古代の11人の使徒たちも、ガリラヤに近い小高い丘の上で、復活された主から昇天の直前に、この同じ戒めを授けられました。

「それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。」(マタイ28:19-20)

使徒たちが地上にいた間、目覚ましい伝道活動が繰り広げられ、ローマ社会の至る所に支部が設立されました。使徒パウロはスペインにまで伝道に赴いたという記録さえ残っています。ところが、使徒たちが殉教し、投獄され、あるいは何らかの事情によってみ業を指導できなくなると、燎原の火の勢いで背教が教会中に広がっていきました。こうした教会の腐敗の中で、神権の救いの儀式や数多くの福音の原則がゆがめられ、神の代理人として行動する権能は取り去られてしまいました。長い霊の暗黒時代が到来し、救い主の教えられた貴重な真理のただ一部だけが残りしました。

1820年の春、天父と御子イエス・キリストがジョセフ・スミスにみ姿を現わされてから、ようやく人類に福音の温かい光がもう一度注がれるようになりました。モルモン経が取り出されて神の力により翻訳され、予言者ジョセフ・スミスに与えられた啓示とともに出版されました。現代の神権時代の使

徒たちは、その指示と権威の下に働くほかの指導者たちと共に、地上に住む人々に、再び完全な福音を宣べ伝え始めました。この回復によって、福音のすべての救いの儀式と原則が再び与えられました。教義と聖約に取められたどの啓示も人々の生活に祝福をもたらす天来のメッセージにあふれ、それらの輝かしい真理を学ぶときに、永遠をかいま見ることができます。それらの教えに心を向けるなら、私たちは個人の啓示と導きを受け、信仰を増して、神のみ前に立つことが許されるようになるでしょう。

回復された真理はきわめて貴重であるために、天父は私たち教会員に、周囲の人々も真理を知ることができるように助ける責任を与えられたのです。天父は次にはっきりと言われました。「……その警めを受けしことあるすべての人はその隣人を警むる責任あり。」(教義と聖約88:81)デビッド・O・マッケイ大管長はこの同じ原則を少し違った表現で次のように強調しました。「すべての会員は宣教師である。」

皆さんの中には、「隣人にどのような警めの声をあげればいいのか」と考える人もいるでしょう。警める、つまり警告を発するとは、普通、危険や差し迫った悪を人々に伝えて、警戒させることです。私たちが証しなければならぬのは、次のような事柄です。「永遠の父なる神と御子イエス・キリストは、予言者ジョセフ・スミスを通して福音を回復された。神の代理人として行動する権威と権能である神権ならびに救いに必要なすべての儀式は、この教会にある。これ以外のどのような宗教、哲学、理論体系をもってしても、救いは得られない。救いは、聖なる神権の権威をもって行なわれる、回復された福音の儀式と原則を通してしか得られない。」

自分のいる建物の中で火災を発見し

たら、火が広がって危険にさらされる前に、大声で危険を人に知らせはしないでしょうか。あるいは、橋が洪水で流されたことに気づいたら、近づいてくる車両にその危険を知らせないでしょうか。

警めの声をあげるのは、最初はむずかしいことのように思える場合もあるかもしれませんが。ところが、比較的容易に、しかもきわめて効果的にこれを行なう方法があります。自分以外の人々に心からの関心を寄せ、キリスト教徒にふさわしい心遣いを示すだけでいいのです。ただしそれは、心からの、偽りのない友情や関心でなければなりません。誠意のない友人関係を作っても、うわべだけの関心はすぐに見破られてうまくいかないものです。

愛する人々や友人、隣人に福音を伝える方法は様々ありますが、役に立つと思われる方法をいくつか紹介しましょう。

- 「家族で毎週開いている家庭の夕べにあなたを招待したいのですが、いらっしゃいませんか。」(この場合、家庭の夕べの中で折を見て福音の話することもできますが、むしろ、友人の質問に答える方が多くなるでしょう)

- 「翻訳された古代の記録を読んでから、私の生活はすっかり変わりました。あなたは『モルモン経』について何か聞いたことがありますか。」

- 「あなたはたばこを吸っていないようですが、私も酒やたばこはたしなみません。実は私の教会で教えている健康法のひとつなんです。それについて、ちょっと話しても構いませんか。」

- 「読書がお好きなようですね。私の生活を変えた本の話をしてもいいですか。」

ちょっと工夫すれば、友人の関心を引きつけるのに最適な方法を考えることができます。自分で福音を教える必要はありません。ただ、福音について知らせ、宣教師に紹介すればよいので

す。相手に興味さえあれば、あなたの家庭や教会に招待して、宣教師のレッスンを受けてもらうのはそれほどむずかしいことではないでしょう。宣教師のレッスンに毎回一緒に出席したり、教会の集会へ同行したりすることによって、心からの関心を友人に示せることは言うまでもありません。

末日聖徒は人々の福利に心を留める民として、この大切な問題を友人や隣人に警告するという主の戒めに不平を唱えるのではなく、喜びとすべきです。福音は人々と分かち合うべき、この上なくすばらしい贈り物です。モルモン経に登場する偉大な予言者のひとりニーファイは、現代の私たちの心を揺さぶる次のような言葉で「警告の声」をあげています。

「それであるから、あなたたちはこれからもキリストを確かに信じて疑わず、

完全な希望の光を抱き、神とすべての人とを愛して強く進まなければならない。それであるから、この後もたえずキリストの言葉をよく味わいながら強く進み、終りまで堪え忍ぶならば『永遠の生命を受ける』、かくの如く天の御父が言いたもうた。

さてごらん私の兄弟たちよ。これがすなわち道である。このほかには、人を神の王国に救う道も名も天下にない。これはまことに、キリストの教えであって永遠に一つの神会を成す天の御父と御子と聖霊の唯一の真正な教えである。」(II ニーファイ 31:20-21)

皆さん一人一人が友人に福音を宣傳伝えるという祝福を受けられるように願っています。そのために必要な力と理解力を求め、また、このみ業に打ち込めるように、し慮深く、熱心に祈り求めていただきたいと思います。

と、兄弟姉妹の励ましにより、親戚、職場の人、知人、タクシーや電車の運転手、体操の先生、美容師、郵便屋さん、伝道に出ている宣教師など、たくさんの方々に合わせて128冊もプレゼントすることができました。

また子供たちにも主の教会を知ってほしいと思い、なかなか子宝に恵まれなかった私たちは里親として子供たちをお預かりし、教会に共に集うこともありました。

結婚して7年が過ぎ、私たち夫婦に初めて子供が送られる時が来ました。私にとって3度目の妊娠でしたので恐怖と不安の毎日でした。教会員や友人の助けによりようやく精神的な苦しみを乗り越えたとき、今度は主人が肝炎で2カ月間入院することになってしまいました。私も身動きが取れず、お互いに自分自身のことで精一杯でした。やがて主人は退院となりましたが、次は主人の母が不慮の事故で入院となりました。私は8カ月になり早産の恐れがあって入院し、ベッドで24時間点滴を受ける生活が1カ月以上続きました。こんな苦難は最初で最後だと自分に言い聞かせ、まさに忍耐の日々でした。そして高齢出産のうえ妊娠中毒症のため、帝王切開となりました。

しかし私はこのような状態を夢の中で1度見たことがあり、祈りを通して主の見守りを感じることができました。病院の先生方のお陰で、無事に子供と対面することができました。主人はまだ全快したわけではありませんが、神権者として私を助け導いてくれます。本当に感謝しています。

「主が命じたもうことには、……前以てある方法が備えてあり、それでなくては、主は何の命令も人に下したまわらない……。」(I ニーファイ 3:7) 試しは私たちが成長するための方法であり、必ず乗り越えることができると証いたします。決心し、必ず達成できると信じて行なうときに、聖霊の導きによって道が開けていくこと、主は私たち一人一人を愛しておられること、この福音が真実であることを証します。(はせがわ・あやこ 支部扶助協会第一副会長)

## 信仰

大阪ステークス部飛鳥支部 長谷川文子

今から13年前、看護学生であった私は、姉妹宣教師との出会いによりバプテスマに導かれ、教会員となりました。1年後には地方部宣教師に召されました。まだ福音を知らない多くの人々に神様のみ言葉をお伝えしたいという思いで、夜勤のあと、約40分もバスに揺られて教会に行く毎日が続きました。祈りと聖霊の助けによって、モルモン経に関心を示してくださる人に何度も導かれました。また死者に対する伝道のために、月に1度は片道3時間かけて東京神殿に参入し、身代わりのバプテスマを受けていました。そんなとき、肉体は疲れていても霊は満たされていました。

大きな誘惑を受け、教会から足が遠のいてしまった時期もありましたが、会員の方々に励まされて悔い改め、着実に教会へ集うようになりました。

やがて結婚について思い悩むことが多くなり、両親からもお見合いを強いられるようになりました。これも伝道の機会と思い、何人かの方にお会いしましたが、心の中にはその都度、神権

者との結婚を望む気持ちがあります。強くなっていきました。ある兄弟に「神様との真剣勝負ですよ」と言われ、時間のある限り独身成人プログラムには参加するようにしていました。

あるとき、全国規模のカンファレンスがあり、そこである兄弟と出会いました。確かにこの人であるという確信があり、それからわずか2カ月後、東京神殿で永遠の結婚をすることができました。主は私たちの霊の状態がふさわしいときに必ず導きを与えてくださいます。

あるときに教会でモルモン経配布プログラムについて教えられ、指導者より「2週間以内をお願いします」と言われました。どのようにするか主人と考えるうちに、ジョセフ・スミスの言った「この地上で最も正確な書物であり、私たちの宗教のかなめ石」である書物、また最も「神に近づくことができる」この書物を、日本全国の知り合いの方々にプレゼントしたいと思いました。モルモン経で地が満たされる日が来たなら、という燃えるような思い



# 神殿奉仕に携わる 人の証

韓国ソウル西伝道部  
シンディー・スノー

**韓**国軍人地方部長会の一員であるニール・ローリンズ兄弟は、ある支部を訪問したときに、ひとりの会員から次のような話を聞きました。

「私はこれまで神殿奉仕については特に証を持っていませんでした。ところが、若い男性アドバイザーの責任をいただいてからは、ミューチュアル(青少年の活動の夕べ)の生徒たちを死者のためのバプテスマへ連れていくようになりました。一緒に行った若い女性の中には、私の娘もいました。娘が初めてバプテスマの水の中へ入ったときに最初に読みあげられた名前が、私の曾祖母の名前だったのです。」

シャーリー・パーマー姉妹は、韓国のソウル神殿で介添え役をしているとき、片道6時間かかる釜山からの神殿ツアーの話をしてくれました。その話によれば、一行の中に、3人の幼い子供を抱え、3週間後には4人目が生まれるという母親が加わっていました。彼女は3日間、6つのセッションをすべて受けました。最後のセッションの終わりに、日の光栄の部屋に入ったこの若い韓国人の母親は、神殿で儀式を受けられたこと、神殿で様々な体験ができたことに感謝し、とめどなく涙を流しました。

次は、3歳のときに父親を亡くした韓国人少年の話です。この少年は父親の写真さえ見たことがなく、成長するにつれて、父親がどんな感じの人だったのか、たびたび思い巡らすようになりました。また、そばにいて自分を育ててくれる父親がいないことを、悲しく思いました。十代の後半に、この少年は宣教師と出会い、福音を学びバプテスマを受けました。バプテスマの水から上がったときです。目の前に父親の顔が見えました。父親は息子にこう嘆願したのです。「私のためにもバプテスマを受けておくれ。」少年は父親

の身代わりのバプテスマを受け、現在は韓国ソウル伝道部の宣教師として働いています。

## リーム姉妹の 祈りの答え

韓国ソウル西伝道部  
シンディー・スノー

**韓**国へ来て3カ月ほどたったときのことです。伝道に出て、まだ言葉にも慣れていないこの時期に、どの宣教師も経験することですが、私もまた悩みにぶつかっていました。遠く離れた家族を恋しく思い、私は初めて孤独感にさいなまれたのです。できることはひとつしかありません。祈りです。

ひんやりと肌寒いある秋の晩に、私は広々とした田んぼの見渡せる家のベランダに出て、祈り始めました。心の内をすべて主に打ち明け、家へ帰りたいのではなく、ただこの孤独感を癒してほしいと嘆願しました。

するとそのとき、時計を見るようにという大変静かな声がしました。そのとおりに見ると、時計の針は午後10時15分を指していました。今度は次のような考えが浮かびました。「今、家では何時ごろかしら。」換算して、すぐにその日の朝8時15分であることがわかりました。突然、私の心に両親の姿が浮かびました。それぞれ仕事に出かける前に、ひざまずいて祈っているところでした。ふたりはほかならぬ私のために祈っています。伝道が成功するように、また幸福であるように祈ってくれているのです。これまでに何度となくしてきた祈りでした。でも、このときは、私もその場に一緒にいて、孤独を癒されたのでした。

不意に私の心の中には、いろいろな人々の姿が次から次へと押し寄せてきました。大学で勉強しているきょうだいたちが私のために祈る姿、祖父母や友人が同じように祈る姿、予言者と使徒たちが神殿の中で世界中の宣教師のために祈りを捧げている姿、世界各地の神殿の中で、それぞれの言葉で行な

われている祈りの輪、そして最後に、世界中の家族が毎日集まって祈り、子供たちが「どうか宣教師を祝福してください」と祈る姿など。私の心は思ってもみなかった平安で満たされました。孤独の痛みは消え、その代わりに宣教師のために祈るすべての人に対して、また天父に対して感謝の気持ちでいっぱいになりました。

人々は、ある肌寒い秋の夜に、家から遠く離れた韓国の地で寂しい思いをしている宣教師のために、自分の祈りが役立つとは知る由もないでしょう。彼らの祈りのおかげで、私はそのとき孤独感を乗り越えられただけでなく、伝道を終える最後の日までいつも励ましを与えられたのです。

## 伝道のみ業

イー・ウン・サン

**伝**道に出て1カ月たったころ、私はそれまでの同僚と別れ、キム・ヨン・ヒという伝道に出たばかりの同僚と戸別訪問をすることになりました。最初に訪ねた家で、高校生と話していると家の中から男の人が出てきて、モルモン経を激しく批判しました。私たちはがっかりし、伝道に出てまだわずか数日しかたっていないキム姉妹は私に何度もこうささやきました。「ほかへ行きましょう。さあ、行きましょう。」けれども私には、「話し続けなさい。この人はモルモン経を受け入れます」というみたまのささやきが聞こえました。そこで、私はその場を動かさずに、涙を流して証を述べました。すると、その人の表情が変わり始め、私はいつの間にか彼の手でモルモン経を渡していたのです。最初のときは打って変わって、その人は丁寧に別れのあいさつをしてくれました。彼を変えたのは私の力ではなく、主の力です。このような奇跡はだれにでも経験できることを皆さんに知っていただきたいと思います。

数日後には、ゾーンでバス伝道の計画があり、私は一生懸命に準備をしました。そして、この伝道活動のために

昼夜よく祈りました。当日、私はバスの中で祈りがこたえられたことを知りました。私が話しかけた乗客は皆、モルモン経を受け取ってくれたのです。16人もの様々な年齢層の人々がモルモン経を感謝して受け取ってくれました。1冊渡すごとに、へりくだって真心から祈りました。この経験を通して、よく準備し、謙遜になる<sup>ひんそん</sup>とき、奇跡は起こり得るものであることがわかったのです。

1989年1月1日、私たちは2時間もバスに揺られながら、家へ帰る途中でした。ある姉妹宣教師が足をけがしたために、その日は彼女の帰還の準備を手伝ってきたのでした。バスに乗っていると、疲れて口をきくこともできなかつたのですが、運転手に話すようにというみたまのささやきを感じました。私はもうへとへとに疲れていましたので、今回だけは声をかけたくないと主に頼みました。ところがなおもその静かな声が促すので、私は足をひきずるようにして運転手のところへ行き、このように尋ねました。「あなたは末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師に会ったことがありますか。」運転手が答えました。「何だって？ 303番だよ。」私は言いました。「違います。末日聖徒イエス・キリスト教会です。」運転手は答えました。「303番のバスだよ。ここで降りなさい。そのバスが来るから。」バスにはほかにほとんど乗客が乗っていないので、運転手は私の声をはっきりと聞き取れたはずですが、私は運転手の答えに面食らって、頭をひねりました。不意に、私は、バスを間違え、反対の方角へ向かっていることに気づいたのです。バスを降り、303番に乗り換え、無事家へ帰ることができました。私はこの経験から、主が聖霊の力を通して、私たちを見守ってくださることを知りました。

ハコク市に住んでいたときのことで、私はある日、同僚とバスに乗って約束の集会へ向かいました。バスを降りようとする、聖霊のささやきが聞こえ、ある女性に話すようにと促されました。あまり時間がなかったので、私はパンフレットを渡し、もっと知りたいことがあれば電話をくださいと言

いました。すると、彼女はこう答えました。「知らない人にどうして電話しなくちゃならないの。」聖霊のささやきの理由が私にもわかりませんでした。数時間後、集会を終えた私たちはバスに乗って帰ることにしました。すると驚いたことに、先程の女性にまた会ったのです。私は再び彼女に近づき、話しかけました。英会話クラスの紹介をし、家庭集会の約束もしました。10か月後、彼女はバプテスマを受け、現在活発な会員として教会に集っています。

世の中は変化していますが、主に対する私の愛は変わりません。私は自分の伝道が終わるとは考えたことはありません。今、主を知っている私はとても幸せです。主が再臨されるまで、私は一生懸命伝道を続けようと思います。そのときに主は、「良い忠実な私の僕よ、よくやった」とおっしゃるでしょう。そして、私は主の足を涙で洗うのです。私にとってはこれ以上の望みも喜びもありません。

## 愛の込もった クッキー

マーガリート・スミス

12月24日午後2時。約束どおり戸口に訪問者が来たようです。訪問を受けることはあらかじめわかっていたし、彼女は自分でそれを承諾したのですが、多少の不安もありました。相手をまるで知らなかったからです。先に電話があり、何か渡したいものがあるとのことでした。「どなたですか。」「宣教師です。」訪問者の返事を聞いて、この中国人女性はドアを開けました。

ふたりの若い男性の手には、小さなカードをつけた包みがありました。包みの中には、手作りのオートミールクッキーが入っていました。彼女はふたりの若者をうれしそうに見つめました。ひとり中国人で、もうひとはアメリカ人でした。彼女の息子が香港へ伝道に出ていて、とても寂しい思いをしていました。なぜ息子がモルモン教会

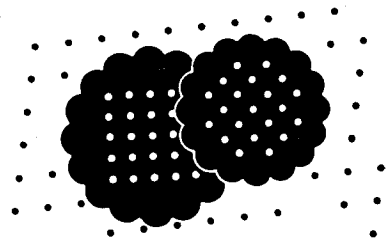
へ入り、さらには伝道へ出て、2年間も家族と離れなくてはならないのか、彼女には理解できませんでした。息子がいない寂しさのあまりに、よく通りへ出ては息子と同じ年代の若者が通り過ぎて行くのを眺めていたものでした。

ふたりの若者は、こう説明しました。最初のクリスマスに東方の博士たちが生まれたばかりの救い主イエス・キリストへ贈り物を持って来ました。これはそれにちなんで用意された、伝道部からのプレゼントです。彼女の息子が伝道している伝道部では、この愛にあふれた贈り物をするのが習慣になっていたのです。この贈り物を通して、彼女は息子がこのふたりの若者のように伝道に出る決心をした理由が、少しわかりました。

このような場面は、何度繰り返されたことでしょうか。「愛の込もったクッキー」を贈るプログラムは、香港伝道部の伝道部長夫人であるフローラ・タイ姉妹が考え出したものです。1,800枚ものクッキーを焼き、包装し、伝道部内の宣教師を通して、会員であるなしにかかわらず、中国人宣教師の親に届けるのです。ほとんどの親がこの贈り物を感謝して受け取り、これまで以上の理解と友情を示してくれるようになりました。

クッキーはまた、ワード部の監督の家にも届けられ、監督は宣教師たちが忙しいスケジュールの合間をぬって訪問してくれたことに感謝の意を表わしました。

それ以来、伝道部には思いやりの込もった贈り物に感動した人々からのカードや手紙が届き、電話がかかっています。伝道部が主催する、解任された宣教師と両親のための送別会では、最初のときはまったく反対の気持ちになる親もいました。「もう少し伝道期間が長ければいいのに。」そう語る親までいたのです。





# チェコスロバキアで伝道再開

## ヨーロッパに8つの新たな伝道部設立

**大**管長会は、チェコスロバキア社会主義共和国における教会活動の再開が認められ、伝道部が新設されることになったと発表した。

さらに、ギリシャ、西ドイツ、ポルトガル、イタリア、ベルギーに加え、ハンガリーとポーランドにも新しい伝道部が設けられることになり、1990年7月より一斉に活動を開始する。これはヨーロッパで同時に開設される伝道部の数としては最も多いものである。

チェコスロバキアで最初に教会が設立されたのは1929年であるが、第二次

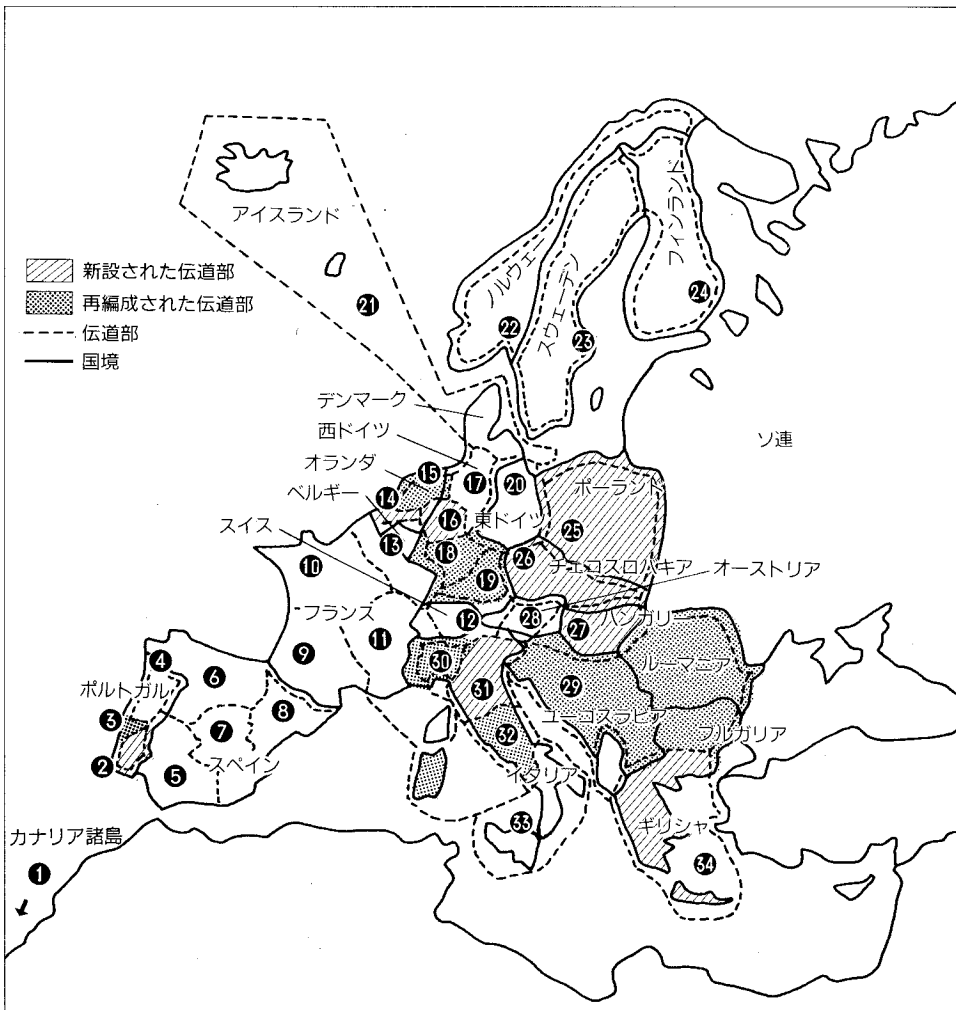
大戦の勃発<sup>ぼつぱつ</sup>により伝道活動は停止された。戦後、一時宣教師の活動が許可されたこともあったが、1950年には再び撤退を余儀なくされた。しかし、現在では、オーストリア・ウィーン東伝道部の管轄下にあるチェコスロバキアの6つの支部に、数百人の末日聖徒が集まっている。

チェコスロバキア政府との交渉には、大管長会の指示の下に、十二使徒評議員会会員のラッセル・M・ネルソン長老、教会のヨーロッパ地域会長を務める七十人第一定員会会員のハンス・

B・リンガー長老が当たり、チェコスロバキア地方部長のジリー・スニダール長老がふたりの補佐を務めた。

ネルソン長老は、ヨーロッパ滞在中に、ルーマニア社会主義共和国ならびにブルガリア人民共和国の国家、市民、指導者のために祝福の祈りを捧げ、かつ、ルーマニアが抱える何千人という孤児救済のために、衣料品や予防接種に必要な抗生物質および血清の供与の可能性について、ルーマニアの政府高官と会談した。

ヨーロッパの新しい8伝道部の本部は、以下の各地に設置される予定である。チェコスロバキアのプラハ、ポーランドのワルシャワ、ハンガリーのブダペスト、ギリシャのアテネ、ポルトガルのリスボン(現在のリスボン伝道部が分割される予定)、西ドイツのジュッセルドルフ、イタリアのパドバ、ベルギーのアントワープ。



1. スペイン・ラスパルマス
2. ポルトガル・リスボン南
3. ポルトガル・リスボン北
4. ポルトガル・ポルト
5. スペイン・セビリア
6. スペイン・ビルバオ
7. スペイン・マドリッド
8. スペイン・バルセロナ
9. フランス・ボルドー
10. フランス・パリ
11. スイス・ジュネーブ
12. スイス・チューリッヒ
13. ベルギー・ブリュッセル
14. ベルギー・アントワープ
15. オランダ・アムステルダム
16. 西ドイツ・ジュッセルドルフ
17. 西ドイツ・ハンブルグ
18. 西ドイツ・フランクフルト
19. 西ドイツ・ミュンヘン
20. 東ドイツ・ドレスデン
21. デンマーク・コペンハーゲン
22. ノルウェー・オスロ
23. スウェーデン・ストックホルム
24. フィンランド・ヘルシンキ
25. ポーランド・ワルシャワ
26. チェコスロバキア・プラハ
27. ハンガリー・ブダペスト
28. オーストリア・ウィーン
29. オーストリア・ウィーン東
30. イタリア・ミラノ
31. イタリア・パドバ
32. イタリア・ローマ
33. イタリア・カタニア
34. ギリシャ・アテネ

太字は新設された伝道部

## トンガ王国の妃殿下、 教会に改宗

**19** 89年10月24日、トンガ王国のタウファハウ・ツポウ4世のめいにあたるエリシバ・フシパラ・バハイ妃殿下が、カリフォルニア州サンタアナでバプテスマを受けた。

トンガ・ヌクアロファ伝道部のイシレリ・T・コンガイカ伝道部長によると、彼女は王室で最初の改宗者である。

現在、トンガのヌクアロファに帰国した妃殿下は、扶助協会の召しを受けて奉仕している。

フシパラ妃殿下は、昨年の夏から秋にかけて長期にわたる合衆国訪問中、サンタアナ第6支部(現在はワード部)に集う会員、ラリポトア・フェホコ、セピウタ・フェホコ夫妻の家庭に滞在し、福音を学んだ。

「支部時代、妃殿下は教会の集会に出席され、会員たちの愛と靈性に大変感銘を受けていらっしゃいました。」そう語るのは、現在監督を務めるヘイララ・T・フィナウ兄弟である。

彼女は、フィナウ監督とふたりの副監督、そして当時の支部伝道主任からレッスンを受けた。

フィナウ監督はこう語る。「最初は、私たちも多少まごつきました。彼女の夫君であるトンガ・フォウイのバハイ殿下に電話をすると、『自由にやらせてください。ただ、信仰には忠実であるように、妻に教えてください』と言われました。」

妃殿下のバプテスマ会には、ロサンゼルス地区の全域から教会員が出席した。バプテスマの後、バハイ妃殿下は改宗の喜びについて証を述べた。

間もなく帰国した妃殿下自身の語るところによれば、妃殿下が教会に改宗したことを喜ばない国王の家族はいないという。バハイ妃殿下はほかの王族と共に、国内の様々な祝典や教会の特別行事に招待を受けている。



## 末日聖徒のプロ野球選手 中日ドラゴンズに入団

**末** 日聖徒のバンス・ロー選手は、過去8年間、アメリカ大リーグのシカゴ・ホワイトソックス、モンリオール・エキスポス、シカゴ・カブスなどで三塁手として活躍してきたが、今シーズンから中日ドラゴンズのユニフォームを着る。

アイダホ州出身のロー選手は、利己心と契約金の肥大化したプロ野球界にあって、「紳士プレーヤー」として親しまれ、大リーグ黄金時代の古き良き精神を持つ貴重な存在として知られている。ロー選手の言葉によれば、これは元ピッツバーグ・パイレーツの選手であった父親の次の言葉によるところが大きい。「人気が上がっても落ちても、人には同じ態度で接しなければいけないよ。」

ロー選手は、宗派を超えて行なわれ

る野球選手のための礼拝集会に出席し、末日聖徒もクリスチャンであることを人々に示している。大リーグの中にはほかにも末日聖徒がいて、ロー選手にはこんなエピソードもある。ヒューストン・アストロズと対戦したとき、そうとは知らずにロー選手が打席に入ると、末日聖徒の捕手アラン・アシュビー選手から「こんにちば、長老」とあいさつされ、思わず和やかな雰囲気になってしまったという。

現在のところ、日本には2年間の予定で滞在することになっているが、その後は滞在期間が延長されるかどうか未定である。将来、本人はプリガム・ヤング大学野球チームのコーチに就任することを希望しているが、大リーグからも、今度は早くも監督として目をつけられている。

## 末日聖徒のスケート選手 フィギュアスケート世界 選手権で銅メダル獲得

**19** 90年3月10日、ユタ州バウンテフル出身のホリー・クック姉妹(19歳)は、フィギュアスケート世界選手権で銅メダルを手にした。末日聖徒の女性がスケート界でこれほど上位にランクされたのは初めてのことである。

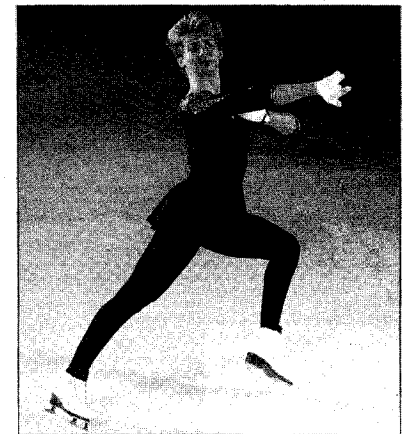
金メダルは、同じくアメリカ出身のジル・トレナリー選手が、銀メダルは、昨年の世界チャンピオン、日本の伊藤みどり選手が獲得している。

ホリー・クック姉妹は、ユタ州バウンテフル北ステークス部第53ワード部に所属し、昨年ビューモント高校を卒業した。4歳半のときからスケートを習い始め、今年2月には、ソルトレークシティとバウンテフルで行なわれたフィギュアスケート全米選手権大会で3位の成績を収めている。

クック姉妹は今回の世界選手権の後、

入賞者によるフィギュアスケート・エキシビジョンツアーに参加し、25の都市を訪問する予定である。ツアー終了後は、バウンテフルに戻り、今度はバルセロナ・オリンピックの選抜選手権に向けてトレーニングに励むことになる。

アシスタント・チームリーダーのモリー・スティルウェル氏はこのように述べている。「彼女は非常に有望な選手です。自信がつくにつれて、これからもっと伸びるでしょう。」

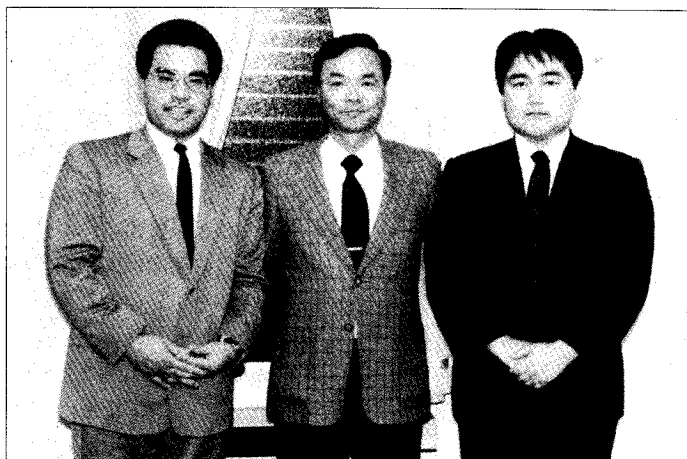




# 再組織された鹿児島地方部長会

ローカル

去る2月11日に開かれた鹿児島地方部大会で、1988年9月から地方部長の責任を果たしてこられた瀬座一義兄弟が解任され、新たに大庭一廣兄弟(写真中央)が召されました。第一副地方部長には引き続き牧善一郎兄弟(写真左)が、第二副地方部長には野村忠司兄弟(写真右)が召されその任に当たります。



## 主に導かれて

鹿児島地方部地方部長  
大庭一廣

これまでの人生とこれからの人生を考えると、真っ先に思い浮かぶのは6年前に我が家を訪れてくれたふたりの若者のことです。当時私たち家族は宮崎から帯広に転勤して3度目の冬を迎えたところで、厳しい寒さにも慣れ、冬を楽しむことも覚えたころでした。ある晩チャイムが鳴り応対に出た妻の前に、とてもきれいな目をしたふたりの若者が立っていました。「私たちは末日聖徒イエス・キリスト教会の者ですが、ご主人様はいらっしゃいますか。」寒さで真っ赤なほおをしたふたりを見た私は、あまりにも気の毒に思い、休んでもらうつもりで上がってもらいました。こうして、私たちは福音を聞くようになったのです。

妻と子供たちは早いうちに証が得られたようですが、私はなかなか証が得られず、家族のバプテスマにも反対するような状態が続きました。再び転勤した宮崎でやっとバプテスマを受けるまで、2年近くもかかってしまいました。バプテスマを施してくれたのは、最初に福音を教えてくれたあのきれいな目をした兄弟で、伝道を終えて帰還されていた神戸から、遠く宮崎まで、私のバプテスマのためにわざわざ来てくれたのでした。それまで、あきらめずに福音を教えてくれた宣教師や会員、それに家族と、数えあげると実に多くの人々に助けられたことに今さらながら驚くと同時に、心から感謝しております。

大変になるのではないかと思いましたが、いざ始めてみると福音の知識も増すうえに、若い方たちの純粋な証にも触れることができ、本当に楽しい時間を持ってました。評議員として地方部内を長い距離にわたって車で移動するときにも、危険な目にも遭わず、神様に助けられていることを実感できました。伝道を担当したときには、指導者のご配慮で、有能で高い霊性を持つふたりの方と共に働くことができ、とても大きな祝福をいただきました。ホームティーチャーとして息子と共に働くとき、私たちのような者でも頼りにくださるご家族がおられることを感じて、頑張ろうという気持ちがいってきます。自分自身の心が思い惑うとき、聖典や祈りを通して、またすばらしい教師の強い証に触れて神様やイエス様の深い愛を感じることができ、いつの間にか証が強まっていたこともあります。

こうして振り返ってみると、神様のご自身のみ業に私たち人間をお使いになっている意味が、おぼろげながらもわかるような気がします。私は、ひとりでも多くの方に永遠の生命に向かって努力する気持ちを持っていただけるよう、また私たち家族も努力できるよう、精一杯努めていくつもりであります。(おおば・くにひろ 1949年生まれ)

その後、会員として様々な召しを受けましたが、引き受けるときには手に余るように感じる責任も、本当に様々な助けにより、力を与えられたことを強く感じております。

昨年は、4月から11月までセミナーの教師をしました。ほかの責任もあり、当初時間的にかなり



大庭一廣兄弟とご家族

# 家族の証

## 障害者を 家族として



札幌ステーク部  
旭川西ワード部  
安田琢三

**長** 男の基は26歳になった。生まれつきの情緒障害者で、現在は施設に入っている。彼が幼児自閉症と診断されたのは2歳のときだった。以来学齢に達しても、言葉や動作は幼児とほとんど変わらず、食事や排泄、衣服の着脱にも介護が必要で、付き添わなければ満足に歩くこともできなかった。これらは年齢が進むにつれて多少改善されたが、逆に自分勝手に動き回ったり、辺り構わず奇矯な行動に出たりし、大きくなって力もあるので止められないという面も出てきた。

小中学校当時は送り迎えはもちろん、特殊学級での授業時間中も、ずっと付き添いが必要だった。大きくなるにつれて歩いて通学するのを嫌がり、やむなく私が勤務の合間を縫って車で送り迎えすることが多くなった。妻は基の世話でいつも大変だった。送り迎えと付き添いはほとんど妻の仕事だったし、次々と生まれてくる子供たちの面倒も見なければならぬ。彼女の活躍と明るい性格とでこの困難を乗り切れたことを、今も深く感謝している。

1年遅れであったがともあれ義務教育を終え、間もなく基は施設に入ることになった。夏休み、冬休みなど長期間家に帰ってくるときにはいろいろと

世話をしなければならないが、前よりずっと楽になったと思う。

最初の子供が障害児ということで、私たち夫婦はかなりショックを受けた。障害児の親同士が父母の会を組織しているが、中には次の子も障害児ではないかと恐れて子作りをやめてしまう親も数多い。そうでなくても障害児は手がかかり、ほかの子供の世話をするのは大変だ。しかし私たちはそうは考えなかった。統計上障害児が重なる割合はごくまれだということもあるが、何とか理想としていた子だくさんの家庭を作りたかったからである。今、基を含めて四男二女の子供に恵まれている。基以外の子供たちが何とか順調に育ったのも、幾分か基の影響があるのではないかと思っている。障害者の兄をもってつらいことや嫌なこともいろいろあったと思うが、確実に身についたのは、障害者への思いやりではないだろうか。弱者、しいたげられた者に対する愛は、クリスチャンにとっても最も大切なものだと思う。基は決して無意味にこの世に送られてきたのではないのだ。

子育てをして気づくのは、中学生から高校生にかけての変化である。子供によって多少の違いはあろうが、それまでの親にべったりの状態から急に反抗的になる。親にとっては思いがけないことなので、しかったりおどしたりして事態を一層悪くすることが多いが、これは成長期のごく当たり前の過程であり、これがないとかえってきちんと自立できないのではなかろうか。この時期の親離れがうまくいくためにも、その前にしっかりとした親と子のきずなを築いておくことが望ましい。親子で一緒に汗を流すのが一番いいのではなかろうか。幸い私の場合、ボーイスカウト活動や学校の山岳部顧問などしていたので、特に息子たちと一緒に

キャンプや登山などができた。

次男は一昨年伝道を終わり、今は三男と四男が伝道中である。私も支部長や監督として若い人たちに伝道に出ることを勧める立場にあったが、いつも心にかかるのは帰還してからの彼らについてである。帰還宣教師に対する我々の温かな配慮が必要ではないかと考える。また末日聖徒の家庭がさらに多くの宣教師を送り出せるよう願ってやまない。(やすだ・たくぞう 1931年生まれ、高等評議員)

## 3人の息子を 伝道に出して



札幌ステーク部  
旭川西ワード部  
安田道子

「お母さん、ぼくは伝道へ行く決心をしました。」息子たちのこの言葉は、私たちの長い間の夢でした。特に次男の直樹は伝道には出ないと言っていましたから、本人からこう言われたときは本当にうれしく思いました。

当時、直樹は家を離れて名古屋の大学に行っていました。それまでも決して親の考えを押しつけることはありませんでしたが、遠く離れた息子に対しては、家族の祈りの中で祈るほかにはできることはほとんどありませんでした。ただ私たち親子にとっては伝道前に離れて暮らしたことがかえって良かったのかもしれません。直樹は離れて初めて親の存在について深く考えたで



しょうし、親としても離れたがために家族のぎずなが強められたような気がします。神殿訪問で上京したとき足を伸ばして名古屋まで行き、夫は地元の監督に直樹のことを頼むため会いに行きましたが、それも今では懐かしい思い出です。

弟ふたり(三男正彦と四男義人)はそれぞれ20歳と19歳ですなり伝道に出、大阪と岡場で働いています。正彦は3歳のとき先天性の心臓疾患で手術をし、私は「治って伝道に出られますように」と一生懸命に祈りました。退院してからも年1回検診を受けに病院へ行っていましたが、17歳のとき完治したと言われ、<sup>あんこ</sup>安堵しました。ところが伝道を目前に控えて3カ月にわたり肩がまひしました。心配しましたが、これも伝道直前に癒されました。

義人は障害を持つ兄の面倒をよくみってくれるやさしい子で、伝道前にはいつも宣教師のレッスンに参加していました。とは言え親の目から見るとどうも頼りないところばかりが目につき、あるときそのことで息子に感情的な言葉を投げつけてしまいました。そのまま伝道に送り出して後悔しているところへ、息子からこのような便りがありました。「私は心からお父さん、お母さんに感謝しています。神殿である兄弟にお会いし、ご家族のことで大変苦勞をされていることを聞きました。彼は『安田長老、家族の愛に支えられて宣教師としてこれから働けるとは、あなたはなんと幸せなのでしょう』と励ま

してくれました。私は涙をこぼしてしまいました。」

若いときの足りない部分や、このまま大人になってしまったら大変だなどと思っていた心配を埋め合わせても余りあるほど、伝道は**すばらしい経験**の積み重ねです。これほど謙遜けんそんになって人の救いのために一生懸命になれるときは、ほかにはないのではないのでしょうか。すべては神様のなせるみ業だと思えます。性格も穏やかになり、人の気持ちもわかるようになって帰還してきた直樹の「ぼくは伝道に出て本当良かった」という言葉を聞くにつけ、天父の愛と祝福に心から感謝せずにはられません。(やすだ・みちこ 1941年生まれ、ワード部扶助協会会長)

## 改宗と 神殿訪問の喜び



札幌ステーキ部  
旭川西ワード部  
嶋崎はつゑ

**35**年前に初めてふたりの礼儀正しい宣教師に会ったときには、私は仏教から離れられず、バプテスマを

受けられませんでした。娘ふたりと夫は改宗しました。夫が6年前に天に召されたのをきっかけに、私は再び宣教師からレッスンを受けるようになり、1986年9月8日、孫の正彦からバプテスマを受け、娘道子の夫から按手礼を施してもらいました。

バプテスマを受けて間もなく、私は交通事故に遭って歩けなくなってしまいました。そのうち糖尿病から腎臓と目を患ってしまいました。事故の傷が回復してからはリハビリテーションをし、歩く練習をしました。教会の方もいろいろ助けてくれ、ある兄弟はモルモン経を勉強できるようテープに吹き込んでくれました。そんな折、神殿訪問の話があり、神殿に行けるよう歩く練習を一生懸命続けました。

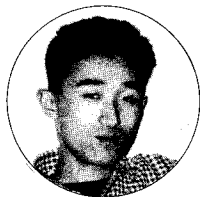
昨年10月、娘たちに連れられて東京神殿に初めて参入しました。少し前から大分歩けるようになっていましたが、遠い北海道から飛行機と電車を乗り継いで行くのですから、階段の昇り降りや健康状態のことも考え合わせると、無事に参入して帰ってこれるかとても心配でした。しかし主は祈りを聞いてくださり、行き帰りも大事なく、儀式も無事に受けることができました。

結び固めの儀式は本当に特別でした。亡き夫や息子、娘、両親と結び固められたときには、目の前に亡き人々がいるように感じ、涙を止めることができませんでした。特に45年前小学校に入る直前に失った息子のことはずっと気にかかっていたので、儀式を受けたことにより大きな平安を得ました。今もたびたびそのときのことを思い出すと平安な気持ちになり、いつも光の中にいるような生活です。恵まれて健康状態も大分良くなり、今では家庭訪問に行くこともできます。娘からも「毎週教会に行って**聖餐**<sup>せいさん</sup>を受けるのが健康にいいのでは」と言われながら頑張っています。神様が長い間導き、祝福をくださっていることを感謝します。(しまぎき・はつゑ 1914年生まれ)



安田ご家族

## 家族



名古屋西ステークス部  
御器所ワード部  
安田直樹

**高**校卒業の春、私は複雑な思いで毎日を過ごしていました。それまでの自分そして現在の自分が末日聖徒としてふさわしくないという自己嫌悪と、家族と離ればそういった気持ちから解放されるのではないかという気持ちが交錯していました。私は当時休みがちながらも教会に出席していましたが、確固たる証や信仰は持てずにいました。教会員の家庭に育ち、生まれたときからの「日曜日は教会」という習慣が教会に足を運ばせていました。教会に行けばたくさんの友人や古くから見知った人がいて、居心地は悪くありません。ただ「伝道」という言葉にはいつもピクツとききました。「直樹、伝道に出るのか」という質問にも答えられませんでした。両親の期待は痛いくらいわかっていたのに、自分の生活や考え方のギャップを否むことはできませんでした。

故郷を離れて進学のため名古屋に来た私は、「ここなら教会に行かなくても両親に知れることはないだろう」という、今思えばまったく幼稚な気持ちから教会を休むことを決意しました。目的意識などまったくなく、目先のことだけに追われる毎日を過ごす中で刺激だけを求めていたのです。ただ心の片隅には「こんなことではいけない」というあせりの気持ちがいつもありました。それは両親から手紙をもらうたびに、近くの教会員の訪問を受けるたびに募っていきました。それまで考えたこともなかった「本当に神様っているのかな」という素朴な疑問がわいてきました。

そのうち過去のことがいろいろと思いついてきました。父と母がどれだけ私を思い、信仰と証を持てるように

助けてくれたか、また両親が数々の苦難の中にあってもなぜ信仰を守り続けてきたのか、深く考えました。そんなとき、両親は神殿訪問のついでに名古屋の私の部屋を訪ねてくれました。両親が私を気にかけてくれているのをひしひしと感じ、私はそれまで父や母に対してかたくなな気持ちで接していたことに気づきました。その日は素直な気持ちで両親に接することができ、夜遅くまで教会のことや私自身のことについて話し合いました。私はこのとき決意しました。真理をこの教会の中に見いだし、天父とイエス・キリストに対する信仰を持てるようになったとき、伝道に出ようと。

私はその日を境に生活を改める決心をしました。伸ばしていた髪を切り、生活を整えることから始めました。しかし何年も聖典を読まず、心から祈っていなかったのが、これらを毎日するのは容易ではありませんでした。そこで、形式的でもいいからただ読んでみる、祈りの言葉を声に出してみようということから始めました。やがてそれが日課となったころには、聖典の言葉がずっと心に入り、それまで感じたことのない感動と何とも言えない気持ちを感じるようになっていました。

ある日モルモン経のニューファイ第三書を数章読んでから、祈って床に就きました。するとすぐに胸が熱くなり、イエス・キリストの姿が心に浮かんできました。そして障害者である兄の姿も。このとき、兄も復活して完全な肉体を得、私たちと語らう日が来るという強い確信を得たのです。また、福音を生活に取り入れることによって変わっていく自分の姿からもこの福音が真実であると知ることができました。

数カ月して私は伝道に出ました。伝道は私の想像をはるかに超えた数々の霊的経験と喜びをもたらしてくれました。それまでの何にも増して貴重な体験でした。

私がどんなに道をそれようとも、忍耐強く愛をもって見守ってくれた両親に感謝しています。また、両親をこの真実の教会に導いてくれた宣教師に感謝しています。(やすだ・なおき 1966年生まれ、ステークス第二副伝道部長)

## 先祖の助け

名古屋伝道部専任宣教師  
田村英美

**伝**道に出ることは求道者のころからの夢でした。そして自分が宣教師になるのは当たり前のことのように思っていました。でも、バプテスマでさえやっとのことで許してもらった私にとって、「伝道に出たい」と両親に言うのは勇気のいることでした。いずれは両親に話さなければならないとわかっていても、なかなか言い出すことはできませんでした。

私はいろいろなことを考え、自分が21歳になった年の9月に伝道に出ようと目標を立てました。けれども、あることをきっかけにもっと早く出なければいけないと強く感じ、誕生日を迎える1月に伝道に出ようと決意しました。そして前年の9月の終わりごろ、両親にその旨を伝えました。案の定両親は大反対し、伝道に出るならば勘当すると言われました。両親の心が和らげられるように何かをしようと思っていたとき、何人かの兄弟姉妹から、系図を調べれば先祖の助けが得られると聞いていたことを思い出し、少しずつ始めていた記録の作成に励みました。母方はどんどん進み、5代までの先祖の儀式が神殿で施されました。それからです。母は私に少しずつ理解を示してくれるようになり、反対の言葉を言わなくなりました。母方はそのようにスムーズに儀式ができたのですが、父方の方はうまく進みませんでした。そして、父の態度も変わりませんでした。

そうこうしているうちに、目標よりも4カ月遅くなりましたが、大管長からの召しが届き、宣教師訓練センターに入る日も近づいてきました。私は父が反対のまま、訓練センターに入りました。訓練中は神殿参入をする機会が3回あります。その3回目の神殿参入のときに、私は大きな祝福をいただきました。父方の先祖の儀式を同期の長老、姉妹たちと共に受けることができたのです。そして、もうひとつの大きな祝福が私を待っていました。私たち



## 皆さんの原稿を募集しています

▶ローカルページでは、テーマ別の証の特集を企画しています。定員会、補助組織、ホームティーチング、家庭訪問、ホームメイキングなどの活動を通して得た証をお送りください。

▶8月号掲載分の締切は、5月31日です。なお、投稿の際、必ず連絡先(電話番号)と教会での責任(役職名)、生年月日を記入してください。お送りいただいた原稿は一部手直しさせていただくことがあります。また、掲載されるまでには若干時間がかかる場合もありますのであらかじめご了承ください。

▶あて先：〒106東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室

☎03(444)5264

が儀式を受けていたときに、センターに父から電話が入っていました。神殿から戻った私に所長ご夫妻が家に電話をかけるように言われました。私はすごく恐れしました。「今すぐ家に帰って来い」とか「連れ戻しに行く」とか言われると思っていたからです。何とも言えない気持ちで電話をかけ、呼び出し音が何度か鳴ると受話器の向こうに父の声がしました。父は言いました。「元気しているのか？ 食事はちゃんと食べているのか？ お前が元気でいてくれさえすればいい。……伝道頑張ってください。」

私はわずかな言葉の中から、父の大

きな愛を感じました。神様の愛を感じました。そして、先祖の大きな助けを感じました。家族は永遠です。今ある家族だけでなく、先祖も大切な家族です。家族の愛のつながりは過去、現在、未来にわたって続き、神様へと続くのです。私たちは神様の大きな家族の一員です。この地上に生まれてきたすべての人が神様の子供です。兄弟姉妹です。私は本当に小さな者ですが「天の家庭に空席をつくらない」ように頑張りたいと思います。(たむら・ひでみ 1968年生まれ、東京南ステーキ部渋谷ワード部出身)



田村英美姉妹(右)と  
同僚の平野ますみ姉妹

### お知らせ

## 第10回ボーイスカウト 日本ジャンボリー 宗教儀礼

ボーイスカウト日本連盟は第10回ボーイスカウト日本ジャンボリーを今年8月、妙高高原で開催すると発表しました。

テーマ 「友と語り、自然と語る」

参加人数 ボーイスカウトおよび指導者3万余名(その内、外国から500名参加)

会場 新潟県中頸城郡妙高村大字関山字武蔵野 妙高高原(JR信越本線妙高高原駅から北約8キロ)

日程 8月3日(金)～7日(火)

(詳細は右図参照)

宗教儀礼 8月5日(日)午前9時～11時  
末日聖徒イエス・キリスト教会エリアスカウト協議会は、会場の一画で安息日の礼拝行事をします。どなたでも参加できます。末日聖徒のボーイスカ

ウトおよび指導者は必ず集ってください。  
末日聖徒イエス・キリスト教会

エリアスカウト協議会理事長  
浅間玄也

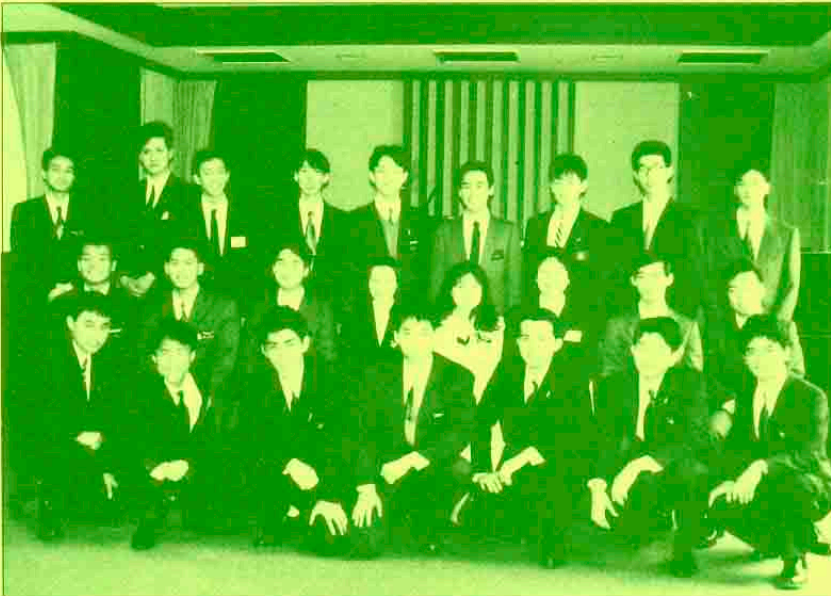
### 日程表

全体行事

時刻	前日	第1日	第2日	第3日	第4日	第5日	翌日
	8/2(木)	8/3(金)	8/4(土)	8/5(日)	8/6(月)	8/7(火)	8/8(水)
5:30		炊事係起床		当番起床			
6:00		全員起床		全員起床			
7:00		朝食		点検 講評 朝礼			
8:30		国旗掲揚		中央掲揚パレード			
9:00	開場式 設営	設営	選択プログラム	宗教儀礼	選択プログラム	選択プログラム	撤営 環境整備
11:00							
12:00	昼食 休憩		交歓 昼食				
13:30	設営	設営完了	選択プログラム	J.大集会	選択プログラム	環境整備	環境整備
16:30							
17:30	夕食 派遣団到着	開会式	友情のパーティー				
18:00	食 派遣団到着完了		国旗降納				
19:00			隊交歓	SC行事	SC行事	閉会式	
21:00			営火	(交歓)	(交歓)		
21:30	班長会議						
22:00	消灯						

※8月6日(月)は、「カブ・ビーバーデイ」が実施されます。

# 3月に召された専任宣教師 第130期生24人



後列左から1-9、中列左から10-17、前列左から18-24

〈名 前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉
1. 多喜誠	鹿児島D / 鹿児島B	仙台伝道部
2. 石井航	東京S / 所沢W	神戸伝道部
3. 大淵亮	札幌西S / 室蘭W	東京北伝道部
4. 土門大幸	札幌西S / 室蘭W	仙台伝道部
5. 吉川克史	東京東S / 小岩W	札幌伝道部
6. 高橋典幸	東京東S / 北千住B	神戸伝道部
7. 小島啓一	札幌西S / 手稲W	大阪伝道部
8. 森村陽一	町田S / 藤沢W	仙台伝道部
9. 泉谷聡	町田S / 町田2W	札幌伝道部
10. 佐藤裕信	東京東S / 松戸W	札幌伝道部
11. 曾我宣	大阪S / 天満橋B	福岡伝道部
12. 阿部公能	東京西S / 八王子W	神戸伝道部
13. 堀井由佳	札幌西S / 小樽W	大阪伝道部
14. 石川垂紀	東京東S / 千葉W	福岡伝道部
15. 田村誠子	熊本D / 長崎B	仙台伝道部
16. 吉川健	北陸D / 金沢B	仙台伝道部
17. 小峰忠	町田S / 藤沢W	仙台伝道部
18. 板橋直人	東京東S / 千葉W	福岡伝道部
19. 越智龍造	熊本D / 長崎B	仙台伝道部
20. 宮城克治	沖縄那覇S / 普天間W	大阪伝道部
21. 柏倉光司	町田S / 藤沢W	札幌伝道部
22. 岡部雄一	札幌西S / 手稲W	東京北伝道部
23. 高野靖之	横浜S / 大船W	大阪伝道部
24. 佐久田朝男	沖縄那覇S / 糸満B	大阪伝道部

S：ステーキ部、D：地方部、W：ワード部、B：支部

# 新役員の内命

1990年2月20日から1990年3月23日までに管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の内命(敬称略)

- 熊本地方部佐世保支部  
新支部長：一丸俊雄  
(前任者：浦山昌志)
- 東京ステーキ部多摩ワード部  
新監督：津村又三郎  
(前任者：青柳弘一)
- 沖縄那覇ステーキ部首里ワード部  
新監督：宮良毅  
(前任者：屋富祖昭)
- 大阪堺ステーキ部三国ヶ丘ワード部  
新監督：尾崎昭彦  
(前任者：北田俊明)
- 札幌ステーキ部旭川ワード部  
新監督：佐藤良三  
(前任者：佐藤真良)
- 沖縄那覇ステーキ部那覇東ワード部  
新監督：真喜屋齊  
(前任者：与座章健)
- 沖縄那覇ステーキ部浦添支部  
新支部長：山崎司  
(前任者：具志堅全彦)
- 東京東ステーキ部千葉ワード部  
新監督：大石幸治  
(前任者：鈴木利和)
- 東京ステーキ部八王子第1ワード部  
新監督：品川文弘  
(前任者：畠中耕三)

# 新ユニット

- ★東京東ステーキ部茂原支部(1990年3月18日千葉ワード部から分割)  
支部長：鈴木利和
- ★東京ステーキ部八王子第2ワード部(1990年3月4日八王子ワード部から分割)監督：岸野陽
- ★八王子ワード部は八王子第1ワード部に名称が変更されました。

## 今から始めよう！

**伝**道でよく使う技術は、今のうちからいくつか学び始めましょう。できるだけ早く身に付けておいてください。伝道中とても役に立つからです。

**お話の割り当てを引き受ける** ワード部や支部でお話をするように頼まれたら引き受けて、良い話をするための準備の仕方を学びましょう。伝道中には、話をする機会がたくさんあります。

**暗記の練習をする** まだ頭の軟らかいときに暗記すること覚えておくと、レッスンプランや聖句を覚えるときに役立ちます。

**人と礼儀正しく交わることを学ぶ** 伝道先では多くの人と知り合いになります。初めて会う人に対して礼儀正しく振る舞い、細かい配慮をしながら接する方法を今から学んでおきましょう。教会へ来たばかりの人の話に耳を傾け、歓迎されていると感じてもらえるような能力を伸ばしましょう。

**料理、洗濯の仕方を学ぶ** 服の上手な手入れの仕方や栄養のバランスの取れた料理法を身に付けておけば、伝道生活はより快適になります。

**食物の好き嫌いをなくす** 珍しい物や変わった物でも食べられるように努めましょう。伝道中には慣れない料理を食べることも何度もあるでしょう。新しい物を試すことを学びましょう。

**外国語を学ぶ** 外国語を知っていると、どんなときにも役立ち、特に宣教師にとっては大きな強みになります。母国内の伝道地に召されたとしても、他国からの移住者のいる地域で働くこともあるでしょう。そのような場合には、あなたの語学能力が福音を伝える鍵になります。

**ピアノを練習しておく** ピアノを学ぶ機会があったら、賛美歌を上手に弾けるようになるまで続けましょう。これはあなたが奉仕する人々に喜ばれる能力です。□





# マスター聖句

**伝**道で用いるマスター聖句を今から勉強しておこう  
 と思う場合は、「宣教師のための福音学習プログラム」[PBMI8348JA]に載っている次の聖句のリスト  
 を参考にするとよいでしょう。

## 伝道活動の目的

- モルモン経ヤコブ5：61
- モロナイ7：31
- 教義と聖約1：17-23
- 教義と聖約18：10-16
- 教義と聖約29：7
- 教義と聖約84：20-22

## 宣教師の人となり

- マタイ5：14-16
- I ニーファイ3：7
- モーサヤ3：19
- アルマ7：23-24
- アルマ17：2-3
- ヒラマン10：4
- イテル12：27
- モロナイ7：45-48
- 教義と聖約4：1-7
- 教義と聖約12：8
- 教義と聖約31：1-7
- 教義と聖約50：13-29
- 教義と聖約58：26-28
- 教義と聖約88：118-26

## 教える人を見つける

- ヤコブ1：19
- アルマ8：10
- アルマ26：29-30
- 教義と聖約33：8-11
- 教義と聖約60：2
- 教義と聖約112：5

## 教える

- レッスンプラン第1課
  - ヨハネ3：16
  - ヨハネ14：6
  - ジョセフ・スミス2：8
  - ジョセフ・スミス2：11-12
  - ジョセフ・スミス2：16-17
- II コリント13：1
- ヨハネ14：26
- モロナイ10：3-5
- アモス3：7
- レッスンプラン第2課
  - アルマ11：42-43
  - アルマ34：8-9
  - ヘブル11：6
  - アルマ34：17
  - 使徒2：28
- III ニーファイ27：20
- 教義と聖約82：8-9
- II ニーファイ31：4-7
- レッスンプラン第3課
  - II テサロニケ2：1-3
  - 教義と聖約1：30
  - モロナイ6：2-4
  - モロナイ6：5-6
- レッスンプラン第4課
  - アブラハム3：22-25
  - アルマ12：24
  - アルマ40：11

- I コリント15：40-42
- I ペテロ3：18-19
- I ペテロ4：6
- 教義と聖約42：22-25
- 教義と聖約89：18-21
- レッスンプラン第5課
  - マタイ22：37-39
  - ヨハネ14：15
  - モーサヤ2：17
- III ニーファイ13：33
- マラキ3：8-11
- ルカ21：1-4
- 列王上17：8-16
- レッスンプラン第6課
  - モーサヤ3：8
  - ヨハネ14：6
  - モーセ1：39

- エペソ4：11-12
- 教義と聖約88：81
- II ニーファイ31：17-21
- バプテスマとフェローシッピング
  - ヨハネ3：2-5
  - モーサヤ18：8-10
  - 教義と聖約20：37
  - 教義と聖約20：71-74

## 指導性

- 出エジプト18：13-26
- マタイ20：26-27
- アルマ48：11-13, 17
- 教義と聖約107：99-100
- 教義と聖約121：34-46





## 伝道の召しを どのようにして 受けるか

### 服装と身だしなみ

**伝**道期間中は主の代理人としてふさわしい服装をします。きちんとした外見を通して、語る言葉をさらに強めなければなりません。断じて外見によって損なうようなことがあってはならないのです。ふさわしい服装と身だしなみはあなたが働きかける人々から信頼や尊敬を得るのに役立ちます。

1. 宣教師はつつましい服装をします。長老は伝道部長の指示があるとき以外は、控え目な色のスーツにネクタイ、白のワイシャツを伝道中もどの集会にも着用します。姉妹もひざ下まである控え目な色彩のスカートを着用します。パンタロンスーツや床に届くような丈のロングドレス、ロングスカートは適切ではありません。

2. 長老の髪は、襟や耳を覆わない長さにします。極端で手入れの面倒な髪型は好ましくありません。口ひげやあごひげは伸ばさず、耳の中央より下にもみあげを伸ばしてはなりません。姉妹は控え目で整えやすい髪型を選んでください。宣教師は常に髪を清潔に保ち、よくくしを入れておきます。

3. 宣教師はあらゆる点できちんと清潔にしておかなくてはなりません。□

**伝**道の召しを受けるためには、監督または支部長の推薦が必要です。監督または支部長と話し合い、自分が伝道に出たい旨を伝えてください。自薦はできません。

監督または支部長の面接を受け、自分が伝道に出るにふさわしくまたその力があるか判断してもらいます。監督または支部長の推薦を受けたら、次に宣教師推薦書に必要事項を記入し、本人と監督または支部長が署名をします。

また監督または支部長は宣教師健康診断書を本人に渡します。このうち内科健康診断書の一部は本人が、また残りは医師が記入し、監督または支部長に提出します。歯科健康診断書は歯科医が記入し監督または支部長に提出します。

この宣教師健康診断書で伝道を行なうのに支障が何もないことが証明されれば、次にステーク部長あるいは伝道部長と面接を行ないます。宣教師推薦書と宣教師健康診断書を持参し、推薦書には2枚の写真を添付します。この写真は宣教師としてふさわしい服装や身だしなみをしたものでなくてはなりません。ステーク部長または地方部長が監督または支部長の推薦に同意するならば、宣教師推薦書に署名をします。そして召しを受ける最終的な手続きのため、この推薦書は宣教師健康診断書とともに伝道管理部に送られます。□

## 持っていく物

**帰** 還宣教師に、伝道中、持ってきてよかった、また持ってくればよかったと思ったものは何か尋ねてみました。以下にあげる物は、任地の伝道部から送られる標準リストには載っていないかもしれませんが、持参すると役に立ちます。

1. 物干し用ロープと洗濯ばさみ。
2. 計量カップと計量スプーン。これらの必需品は必要なときにないことが多いようです。
3. 使い慣れた料理の本。おそらく同僚とふたり分の食事を作ることになるでしょう。母親が作った料理の仕方を正確に覚えていたらどんなによいのにと思うこともあります。(ところで大部分の国では計量にメートル法を用いていますが、伝道地によってはほかの計量法に変えなくてはならないこともあります)
4. 自分のすべての服に合う替えのボタン。
5. マジックテープ(オムツカバーなどに用いる接着

テープ)。これがあるといろいろな用途に使えて便利です。

6. ゴムのサンダル。
7. あなたの身に着ける物が平均サイズでないなら、替えの靴や服。
8. 雨量の多い地域に行く場合はゴムのオーバーシューズ(防水、防寒用に靴の上にはくゴムまたは防水布製の靴)。
9. 姉妹たちは、製品のサイズが異なる国へ派遣される場合など、替えのナイロンストッキングがたくさん必要です。
10. 予備のメガネやコンタクトレンズ。
11. 応急手当ての道具や体に合う使い慣れた薬。
12. 裁縫道具とすべての服に合う糸。
13. ハサミやポケットナイフ。□







## 教会における礼儀

**宣**教師にとって教会における日常の礼儀を守ることが非常に大切です。次にあげる事柄について考慮してください。

1. ほほえみを絶やさず、会員や求道者に温かいあいさつの言葉をかける。
2. 穏やかに話し、混雑した建物内ではゆっくり歩く。
3. 粗暴な振る舞いを避ける。
4. すべての集会において時間を厳守する。会が始まる5分前には着席する。
5. 教会の集会中に髪をとかしたり、つめを切ったりしない。
6. 教会では食べたり、ガムをかんだり、ようじを使ったりしない。
7. 賛美歌を歌うときは必ず一緒に歌う。
8. 集会中は静かに注意深く聞く。眠ったり退屈な素振りをしたりしない。
9. 礼拝堂の中では敬虔さを乱さず、むしろ敬虔な雰囲気けいけんを盛り上げるようにする。
10. 祈りの最後にはっきり「アーメン」と言う。□

## 宣教師の日課

**宣**教師の時間は貴重なので毎日の時間を最大限に活用する必要があります。以下にあげるのは、奨励されている日課の一例です。

- 6:30 起床
- 7:00 同僚との勉強会
- 8:00 朝食
- 8:30 個人の勉強
- 9:30 伝道
- 12:00 昼食
- 1:00 伝道
- 5:00 夕食
- 6:00 伝道
- 9:30 伝道終了。翌日の計画を立てる
- 10:30 就寝

外国語で伝道している場合は言語を学習するための時間を毎日取ります。日記を書く時間や運動する時間も、日課に取り入れます。□



ELDER JACOB  
MEMBER  
OF THE  
FIRST  
COUNCIL  
OF THE  
MORMON  
CHURCH

# 質疑応答

## 私は宣教師になれるでしょうか

私はこの教会が真実であることを知っていますが、とても内気で、良い生徒ではありません。聖句を暗記したり、外国語を学んでいる自分など、とても想像できません。戸別訪問したりレッスンをしたりすることを思うと本当に怖くなります。どのようにしたら宣教師になれるのでしょうか。

本誌の回答は問題解決の一助として与えられたものであり、教会の教義を公式に宣言するものではありません。

### 回 答

**宣**教師は皆それぞれ体格も性格も才能も異なります。中には、社交的で自信に満ちた人もいれば、内気な人もいます。学校で良い生徒だった宣教師もいれば、そうでなかった宣教師もいます。またスポーツが好きだった人もいれば、嫌いだった人もいます。

このように様々な個性を持った宣教師がいることは、世界中のすべての人々の心を動かすために必要なことです。

ほかの宣教師がある人の心を動かせない場合にも、あなたがその人の心を動かすことができるかもしれないのです。

また内気であることをそれほど気に病む必要はありません。モーセは内気でした。主がイスラエルの民をエジプトの地から連れ出すためにモーセを召されたとき、モーセは自分がその召しにまったくふさわしくないといい、このように言いました。「ああ主よ、わたしは以前にも、またあな

たが、しもべに語られてから後も、言葉の人ではありません。わたしは口も重く、舌も重いのです。」主は答えてモーセに言われました。「だれが人に口を授けたのか。おし、耳しい、目あき、目しいに、だれがするのか。主なるわたしではないか。それゆえ行きなさい。わたしはあなたの口と共にあって、あなたの言うべきことを教えるであろう。」(出エジプト 4：10-12)

エレミヤもまた内気でした。主が彼を召されたとき、エレミヤはこのように言いました。「ああ、主なる神よ、わたしはただ若者にすぎず、どのように語ってよいか知りません。」主は答えてエレミヤに言われました。「あなたはただ若者にすぎないと言っているのではない。だれにでも、すべてわたしがつかわす人へ行き、あなたに命じることをみな語らなければならない。彼らを恐れてはならない、わたしがあなたと共にいて、あなたを

救うからである。」(エレミヤ 1：6-8)

人は宣教師の説得力のある議論によって教会に入るわけではありません。人は聖霊により気持ちを動かされて教会に入るのです。忠実な宣教師には聖霊の力が豊かに注がれます。あなたはこの力強い聖霊の力を受けて伝道することができます。この力はほかの何よりも人々の心を感動させるのです。

主はどうして、未熟な若い男性や女性を伝道地へと送るのでしょうか。また主はどうして福音を教えるために、博學で勇気ある人だけを送らないのでしょうか。

それは、主が何よりも宣教師に求めておられるのは、謙遜けんそんでよく祈ることだからです。

主は言われました。「われは人を謙遜にするために人に弱点を与うれど、すべてわが前にへりくだる者には充分わが恵みを授くるにより、かれらがわが前にへりくだりわれ



を信ずる時にはその弱さを強  
きに変えん。」(イテル12:27)

これは主からあなたへの約  
束なのです。もしあなたが謙  
遜で信仰を持って一生懸命に  
伝道するなら、主は弱点を強  
きに変えてくださるでしょう。  
伝道から戻るとき、あなたは  
伝道に出発したときとは違っ  
た人になっているでしょう。  
モーセは主に仕えることによ  
って成長しました。エレミヤ  
は心を尽くし、勢力を尽くし、  
体力を尽くして主に仕え、変  
わりました。あなたの人生も  
また変わるでしょう。そして  
その結果、生涯を通して祝福  
を受けることでしょう。

モーセとエレミヤは自分が  
ふさわしくないと感じていま  
ましたが、主は彼らを必要とさ  
れました。また、主は正規の  
学校教育をほとんど受けてい  
なかったジョセフ・スミスと  
いう14歳の少年を必要とされ  
ました。主はヒラマンの2千  
人の兵士を必要とされました。  
彼らは一度も戦ったことはあ  
りませんが、主が祝福してく  
ださるといふ信仰を持ってい  
ました。主はゴリアテという  
名の巨人と戦う、若き羊飼  
いの少年ダビデを必要とされ  
ました。

そしてまた主はあなたを必  
要とされているのです。

## 青少年の意見

勉強し、祈り、そしていつ  
も伝道のことを念頭に置いて  
生活してください。初めはそ  
うすることはむずかしいでし  
ょう。しかし主があなたを助  
けてくださいます。必要な知  
識を学べるかどうかについて  
は、心配しないでください。  
セミナーや個人的な学習を

通して成長するにつれて、だ  
んだん身に付いてくるもので  
す。自分自身の力だけで何か  
を成し遂げられないときは、  
ただ最善を尽くしてください。  
そうするならば主が助けてく  
ださい。また内気だから  
だめだと思わないでください。  
ただあなたの証が増し加えら  
れるように努めてください。  
このようにするならばあと  
の問題は自然に解決するもの  
です。そして、いつも天のお父  
様にお祈りしてください。



エイバー・カラスコ(17歳)  
ペルー、クスコ市在住

あなたの気持ちは本当によ  
くわかります。私自身も同じ  
疑問を持ったことがあるので  
す。そこでこの問題について  
考えながら聖典を調べてみま  
した。教義と聖約31章3節に  
は、このように書かれていま  
す。「<sup>なんじ</sup>汝の心を励まして喜べ、  
そは汝が伝道する時来りたれ  
ばなり。汝の舌は弛まれば、  
今の代の人々に大いなる喜び  
のよき音ずれを宣べよ。」こ  
の聖句は私がこの疑問を解決  
するのに非常に役に立ちまし  
た。天父の助けがあれば、ど  
のような恐れも容易に克服で  
きると思います。



ジョディー・スウィーニー  
(17歳)  
マサチューセッツ州  
アガワン市在住

問題は、あなたに何ができ  
るかではなく、神様に何がで  
きるかということです。あなた  
にできないことでも、神様  
にはできます。神様は全能だ  
からです。み業の発展に貢献  
する能力を伸ばそうと努める  
ならば、神様は私たちの努力  
を祝福してください。私も伝  
道をはじめたときは、疑いと  
不安に満ちていました。戸  
別訪問して玄関口に立っても、  
何と言ってよいかわからない  
ことが何度もありました。私  
は何も言うことができなかつ  
たので、同僚が私に代わって  
話さなければなりません。し  
かし、私は自分で奮起する  
よう努力を始めました。これ  
が鍵です。確かに人生には  
実行してみなければ学べない  
ことがあるのは事実です。泳  
ぎ方を教える参考書はあり  
ますが、実際に水に飛び込む  
までは泳ぐことはできません。  
神様の業についても同じこと  
です。私たちが本当にみ業を  
行ないたいのなら、天のお父  
様が祝福してください。これ  
は確かに真実です。



ガルシア長老(20歳)  
ベネズエラ・カラカス伝道部

あなたの内気さをつまづき  
の石にしないでください。モ  
ーセも召されたときには、完  
全ではなかったことを思い出  
してください。彼は託された  
召しを果たすことができると  
は思ってもいませんでした。  
しかし神様の助けにより成功  
しました。もし本当に福音を  
宣べ伝えたいなら、あなたも  
神様の助けを受けられます。  
偉大な演説者や学者になる必

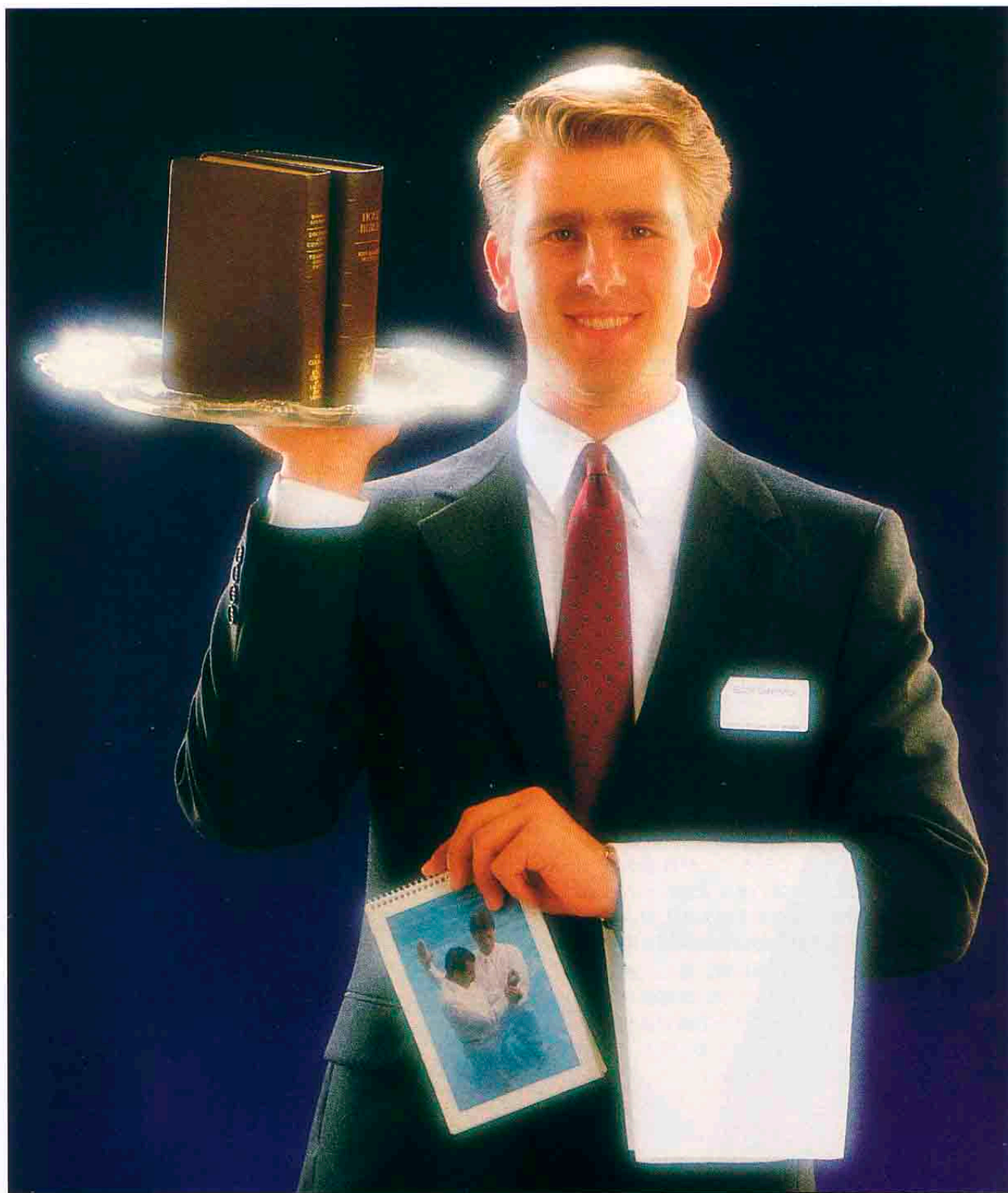
要はありません。必要なこ  
とは仕えたいという望みなの  
です。主に信頼してください。  
あなた自身の能力が足りない  
ときは、あなたの口を通して  
みたまが語り、メッセージを  
伝えることができるのです。



ノーラ・ベルトラン(18歳)  
ボリビア、ラパス市在住

ほかの人々を教えるための  
勇氣と大胆さを持てるように  
神様に助けを祈り求めるとよ  
いと思います。帰還宣教師と  
話をし、伝道に出る準備を  
助けてくれるように頼むこと  
もできます。教会に入ってい  
ない友達に福音について話を  
して、証をしたり、断食証会  
や別の機会をとらえて証をす  
るのも良い方法です。証をす  
ればするほど、伝道に行っ  
たとき証をしやすくなるでし  
ょう。聖典を読んでください。  
ノートを取り、読んだ聖句に  
ついて何が書かれていたかを  
書いておくことはおそらく役  
に立つでしょう。聖句が覚え  
られなければ、大切な聖句を  
いくつか選んで索引カードを  
作ってください。そして、伝  
道に行くことがあなたの内気  
さを克服するのに役に立つこ  
とを忘れないでください。だ  
れかが助けを必要としている  
とき、頼まれるまで何もせず  
にじっと待っているのではなく、  
積極的に奉仕してください。  
ケリー・オービット(13歳)  
マサチューセッツ州  
サウサンプトン市在住

# 飢えと闘う



伝道に出なさい

私たちは命のパンを分け与えることによって自分自身の霊的な飢えを満たすことができる。(ヨハネ 6 : 35参照)



# 兄弟愛

ドン・L・サール

ティノー・モーレイラ兄弟とキーム・モーレイラ兄弟は、ポルトガルに教会を築くために喜んで働いています。

ローレンティーノ・モーレイラ兄弟にとって福音は、愛する人たちに与えることのできる見つけたばかりの財宝のようなものでした。それを分かち合おうと、彼は次々に行動を起こし、結果として100人以上もの人を改宗し、さらには弟のホアキムの生命をも救ったと言えます。

ローレンティーノ(友人の間ではティノーと呼ばれています)が、ある日ポルトガル第二の都市ポルトにある自宅にいと、ふたりの若い女性がドアをノックしました。彼はもう自分の信じる教会に入っているので彼女たちが伝えようとしている教えには全然興味がないと丁重に断りました。けれども、彼女たちの教会堂で映画を見たくないかと尋ねられたときには承知しました。

その映画「最初の示現」がとても興味深かったので、ティノーは1度宣教師のレッスンを受けることを承諾しました。そして、その1度が次々に続くことになったのです。2度目のレッスンまでには、みたまを感じて、とても良い気持ちを抱くようになりました。このふたりの若い女性の教えてくれることが彼の生活を変えることのできるものとわかったのです。

「宣教師が、祈りを通してあることが真実かどうかを神に尋ねることができると言いましたが、それは私にとって受け入れ難い教えではありませんでした」と彼は言います。それよりも3年前、彼は古代文明に関する一連の書物を読んでいて、その起源には、きっと神がかかっているに違いないと思ったのです。2年余りの間、ティノーは、自分が教えられてきた方法で祈りを唱え、それらの文明についてもっとよく学ぶことができるように神に助けを求めているのです。(彼は、モルモン経について教えられたときにその祈りが十分にこたえられたのだと感じています)







宣教師から何度かレッスンを受けたティノーは、教会の教義に対してひとつの基本的な疑問を抱きました。ジョセフ・スミスは神の予言者なのだろうかという疑問です。それで、ティノーは天父にそのことを尋ねてみました。すると即座に「平安と大きな喜びを同時に感じました。口元にはほほえみがこぼれ、すぐに幸福な気持ちになりました。『ああ、これが答えなんだ』と心の中で思いました」と、彼は話してくれます。

彼は福音について学んでいる事柄を自分ひとりの胸に納めていることができませんでした。ティノーは、それ以前のことを思い出して、「私は、人生は死で終わってしまうものではないと信じていました」と述べています。しかし、肉体の死の後に何かがあるかについては、自分で推測するほかはありませんでした。ところが今や救いの計画のことを教わったのです。ティノーはほかの人たちにも知ってもらいたいと思いました。彼はこのように述べています。「私には素晴らしい友人が何人かいました。この良きおとずれをぜひ彼らにも伝えたいと感じたのです。」

その「素晴らしい友人たち」のひとりが弟のホアキム(愛称「キーム」)でした。ティノーがキームを自分のバプテスマ会に招待したとき、キームは自分の兄が教会に通っていたのを知って驚きました。

それまでの数年間、キームはティノーとはまったく違った方向に関心を向けていました。キームは麻薬を常用して無軌道な生活を送り、神など信じないと断言していました。彼は墮落の一途をたどっていたのです。「教会について教わらなかったら、多分今ごろはもう生きていなかったでしょう」と、キームは昔を振り返って言います。当時キームがティノーのバプテスマ会に出席するのを承知したのは、ティノーが家族のだれかに会に出席してほしいと願ったという、それだけの理由でした。

礼拝堂は、健全な雰囲気になり、身なりの整った人々が出席していて、キームには別世界のようでした。バプテスマ会の後で、キームは宣教師の話や聞くように誘われたので、教会に残りました。彼はそのレッスンの内容すべてに、積極的に応じました。「自分でもびっくりしました」と彼は言います。

レッスンの最後にキームはお祈りをするように頼まれました。「私は、生まれてから1度もお祈りなんてしたことがなかったんですよ。」しかし、宣教師が祈りの方法を教えてくれました。「あのときの祈り以上に良い祈りはしたことはありません」と、彼は思い返します。祈りが終わって、「私は立ち上がりました。すると、まるで飛んでいるような感じなのです。」「これは何ですか。ぼくにはわからない。今ぼくが感じているこれは一体何なんですか。」彼は何度も宣教師に尋ねました。大きな平安、光明、喜びが彼を包んでいたのです。キームは、一晩中、自分の感じたもののことを話し続けました。

ところが彼は、次の日には、その経験は実際はそれほど重大なものではなかったのだと自分に言い聞かせ、こう言っていました。「ねえ、ティノー。ぼくはもう兄さんの教会には行きたくないよ。」

しかし、それからの1週間、なぜ自分はあの祈りの後であんなに素晴らしい気持ちを経験したのか知りたいという望みが心の中にわき上がってきたのです。そして、ティノーの教会からは離れていようという決意は崩れ去りました。ある夜遅く、キームがティノーを揺り起こし、はっきりとした語調で「明日、教会に行きたいんだ」と言ったのです。

キームはこのように語っています。「そして、あの瞬間から私はバプテスマを受けたいと思ったのです。残りのレッスンには何の疑問も感じることなく、すべてを信じることができました。」「天父がその子供たち一人一人を心にかけてくださる」ことを学ぶのは喜びに満ちた発見でした。彼は兄のバプテスマからちょうど3週間後にバプテスマを受けました。

ティノーは改宗してからずっと、与えられたすべての教会の召しを熱心に果たしてきました。そして、2、3年たったころ、自分にはさらに与えることのできるものがあり、またそうすべきではないかと気づきました。つまり、専任宣教師として時間を捧げるのです。伝道に出ることによって、ほかの若い人たちが数年前に自分をあれほど悩ませた人生についての疑問に答えを見いだせるように助けることができるのではないかと感じたのです。

ティノーと同様、キームもポルトガルで伝道をしました。リスボン伝道部のハロルド・ハイラム伝道部長から「モーレイラ兄弟、あなたは宣教師になりますよ」と言われたとき、キームは「どのようにしてですか。私にはお金がありませんし、両親は教会員ではないんですよ。それに学校をやめなければならなくなります」と答えました。しかし、伝道部長は彼に2、3カ月後には伝道に出られるように準備をしなければならぬと力強く説きました。そこで、キームはどうしたらそうすることができるのか主に尋ね求めて、祈り続けたのです。

ある夜のこと、彼は自分が宣教師の服装をし、スーツケースを下げて家を出る夢を見ました。そして目が覚めたときには、実際にそうなることを確信していました。経済面での援助は教会を通して得られることになり、ホアキム・モーレイラ兄弟は伝道の召しを受けるために学校を中退しました。ポルトガルでは大学への再入学許可を得ることはむずかしいので、それは大変な決断でした。

このふたりの若者は、両親に伝道に出ることを話したとき、もっと強く反対されるだろうと思っていました。おそらく、モーレイラ夫妻は、教会が息子たちに及ぼした影響に感謝していたので、許可しないわけにはいかなかったのでしょうか。そうは言っても、両親、特に母親は、自分たちの宗教を変えることには抵抗しました。

しかし、福音の影響を受けて、キームとティノーの家族の生活は次第に変わっていきました。ティノーが伝道に出て間もなく、父親がバプテスマを受けることになりました。ティノーは近くの伝道地で働いていたので父親にバプテスマを施す特権にあずかりました。母親の方は、最初は、伝道地から送られてくる息子たちの手紙さえ読むことを拒んでいましたが、キームは、母親の心が動くようにと特別な祈りを込めて1通の手紙を書き送りまし



た。彼の祈りはこたえられ、それからほどなくして母親は自分の夫からバプテスマを受けることになったのです。

ティノーとキームは共に、伝道地で霊的な力という宝を見いだしました。キームはある未亡人に伝道しようとしていたときのことを思い出します。ほかの教会で人生の大部分を宣教師として過ごした人の奥さんでした。その女性は娘が末日聖徒だったので宣教師のレッスンを受けることに同意しました。しかし、あるレッスンを受けているとき、自分の教会の教えが正しくないとはとても認められないと思いました。「モーレイラ長老、私はもうこれ以上この教義は聞きたくありません。私は夫が始めた伝道活動に終わりまで務め励むつもりなのです」と彼女は言いました。キームは、何と云えばいいのかすぐに心の中で祈り求めました。そして、彼女の夫がすでに霊界で福音を受け入れていることを確信させるようにとの靈感を受けました。

後日、その女性の娘がキームに話してくれました。その夜、彼女はひとりで祈った後で、横になってどうしたら母親が福音を受け入れられるように助けることができるかと瞑想していると、突然、「部屋の中に父の姿が見えました。父は『あの宣教師は真実を語っている。だから、私はお母さんにバプテスマを受けてもらいたいんだよ』と言ったのです。」

娘の経験のおかげで、母親は再び宣教師のレッスンを受けることを承知しました。今度は以前と違い、彼女はみたまを受けていました。そして、1週間後にバプテスマを受けたのです。

ティノーの伝道は思いがけない成り行きになりました。ポルトガル人の宣教師には兵役義務の一時猶予が許されなかったため、ティノーは空軍に徴兵されました。彼は今でも、当時リスボン伝道部のR・ペリー・フィックリン伝道部長の勧告を覚えています。伝道部長は、モーレイラ長老の伝道期間はまだ終わったわけではなく、ただ「ほかの地域より困難な地に転任になる」だけなのだと

話してくれたのです。ティノーは空軍でも多くの人々を教え、バプテスマを施し続けました。

キームも、伝道を終えてからもずっと何人かの仕事仲間に福音を宣べ伝えています。実際、このふたりの兄弟は同じ目的地に向かって同じような道を歩んでいます。ふたりとも、今では結婚していますが、相手はモーレイラという同姓の姉妹です。ティノーもキームも20代半ばになり、教会の指導者として教会活動に深くかかわっています。キームはワード部の第二副監督とステーク部高等評議員、ステーク部の伝道主任を兼任し、ティノーの方はワード部長老定員会会長とステーク部第一副伝道部長、地域の教会教育部指導主事としての責任を同時に果たしています。(ティノーは現在、リスボンの教会で働き、一方キームは引き続きポルトに住んでいます)

これらの責任をすべて果たすと同時に、日常生活におけるほかの役割もこなしていくのはむずかしくなかったのでしょうか。

困難などは考慮すべきことではなかったとティノーはあっさりと言います。「伝道に出ることを選んだとき以来、教会で活発に奉仕しようという決心は変わらないのです。」

ティノーが福音を伝えた友人たちの中のふたり、ホゼ・ゴベイヤ・ペレイルーとエルナーニ・セルケイラも伝道に出ました。ティノー、キーム、ホゼ、エルナーニは、4人で100人以上の人々を教会に導き、専任宣教師としての召しが終わって何年もたった今でも、やはり心は宣教師であり続けています。

ティノーは自分の家のドアをノックしてくれた宣教師によって植えられた「あの最初の小さな種」がなかったなら、このようなことはまったく起こり得なかっただろうと回顧しています。

そして今、目をみはり、胸を躍らせて、このように語っています。「その木は生長し続けているのです。それも、とても速く。」□



モーレイラ兄弟が改宗したポルトガル北部のポルト市。1976年に最初の宣教師がポルト市に到着。1987年7月には、ポルトガルで2番目の伝道部が設立された。



# とにかく始めよう

この子供たちが伝道の目標を立てたときには、自分たちが地球の反対側に住む家族に影響を及ぼすことになるなどとは夢にも思っていませんでした。

**キ**ム・デービスとニール・デービスはだんだん心配になっていました。

ふたりが育った家庭には、目標を立てたら達成するためにできる限りの努力をするという信念がありました。つまり両親も、そして6人の子供たちも、ひとたび家族としての目標を立てたら、途中でやめることはほとんどありえないのです。

ふたりが今、気をもんでいるのはそのためです。期限はだんだん迫ってきています。半年ごとに新しい家族に福音を紹介するという目標を立て、今まさに最後の週だというのに、関心を示す家族がまだひとつも見つかっていないのです。

今まではこの目標を何度も達成してきました。デービス家が住んでいたマサチューセッツ州ボストンやワシントンD.C.では、末日聖徒の数が少なく、たくさんの家族に福音を紹介することができました。14歳の長女キムはこう語っています。「うちに招待して

大家族はとても楽しいということがわかりました。私もいつかこのような家族を持ちたいと思います。

— スホルト・ケレスター

大好きなズホルトは、本当の兄のようですし、彼の両親のギデオンとピロスカは、本当の祖父母のようです。

— シンディー・デービス



## リチャード・ダニエル

彼らがハンガリーで福音を受け入れている様子に私たちはとても感動しました。

—キム・デービス

ケレスター一家と知り合いになったことは、確かに私たちの生涯で最も大きな祝福のひとつです。

—キム・デービス兄弟



宣教師にレッスンしてもらっただけでなく、家庭の夕べやクリスマスの特別プログラムなどのいろいろな活動に誘ったものです。」

しかし現在住んでいるユタ州では、教会員ではない家族を見つけて福音を伝えるのは容易なことではありません。半年という期限が終わりに近づいているというのに、まだ見つかっていないのです。デービス家の人々は自分たちの願いが正しいことを知っていたので、家族で祈り、断食をしました。6人の子供たちも、それぞれ個人の祈りの中で助けを求めました。

そして6カ月目の最後の日、彼らの祈りはこたえられたのです。

キムは次のように説明しています。「父は海外のお医者さんから、記事のコピーを依頼する外国郵便をよく受け取っていました。」父親のキム・デービス博士は、いくつかの医学雑誌に研究報告を載せていました。「それでハンガリーから手紙を受け取ったとき、封筒を開けて中を読むまで、いつもとは違う手紙だということに父は気がつかなかったのです。」

12歳のニールは言っています。「それはもうみんな大喜びでした。」手紙はハンガリーのケレスター家からのものでした。ハンガリー国営テレビで放送されたユタ州のドキュメンタリー番組の中で、教会とその教えが紹介され





デービス家は音楽一家で、ズホルトによくいろいろな楽器の演奏の仕方をお教えました。その返礼に、ズホルトはハンガリーの文化を紹介しました。「彼はハンガリー料理を作ってくれたり、ハンガリー語を教えてくれたりし

ました」と、キムは語ります。しかし、とりわけうれしかった経験は、ズホルトの両親がハンガリーからやって来て、ソルトレーク神殿で結び固めを受けたことです。



たのです。その中で一家が最も興味を覚えたのは、家族が永遠に一緒であるという教えでした。そのような信条を教えている教会についてもっと知りたいと思い、医師である父親と医学生の息子が古い医学雑誌からユタの住所を調べていて、偶然見つけたのがデービス家だったのです。そこで、デービス家にあてた手紙を、教会の情報を知らせてくれる人に転送してもらえないかと依頼してきました。

もちろん、デービス家はケレスター家の手紙を転送する必要がなかったわけで、早速ハンガリー語で書かれた教会の資料をできる限り集めて、新しく見つけた友人に送りました。さらに福音に対する自分たちの証を書き、家族の写真を同封してケレスター家に送りました。

ケレスター家ではあまりにも早くアメリカから大きな箱が届いたのでびっくりし、早速資料を熱心に読み始めました。手紙を受け取ると、彼らの驚きは一層強まり、大家族にもかかわらずきずながとても深いことと、福音に対する証がとても強いことにびっくりしました。ケレスター家にはひとりしか子供がいませんでしたが、家族のきずなについては深く共感するところがあり、自分たちのために役立つものを見つけて胸を躍らせました。

やがてデービス家とケレスター家は手紙や写真を頻繁にやりとりするようになりました。キムはこんなふうに言っています。「私たちはとても仲良くなりました。手紙が届くと家中で順番に読み、家庭の夕べでも紹介しました。彼らがハンガリーで福音を受け入れていく様子に私たちはとても感動しました。こんなすばらしいことが起こるなんて信じられないほどでした。」

やがてデービス家はオーストリアのウィーンの伝道部長に連絡を取り、ケレスター家は月に1度宣教師のレッスンが受けられるようになりました。

ニールは次のように語っています。「彼らがオーストリアのウィーンでバプテスマを受けるという知らせは、本当にうれしかったです。バプテスマのときの写真を受け取ったときは、もう最高でした。」

これでキムとニールの話を終えてもよいのですが、まだ後日談があるので。ケレスター家の息子のズホルトはハンガリーでたったひとりの独身成人でしたので、デービス博士は彼にソルトレークに来てしばらく一緒に住むように誘いました。ズホルトは医学の勉強をしていたので、デービス博士の研究を手伝うことになりました。

このようにして、デービス家の伝道に対する努力は、すばらしい兄弟が家族に加わるという形で実を結びました。思いがけないハンガリーからの友人を迎え入れることは、一体どんなものなのでしょう。

キムは次のように言っています。「彼が初めて来た日のことを覚えています。私たちは彼の名前すら発音できなかったんですから。でも私たちはとても親しい友達になりました。彼は登校前の早朝セミナーに出席してい

た私を毎日車で送ってくれました。また、学校に来て話をしたり、ハンガリー料理を作ってくれたり、ハンガリー語を教えてくださいました。ほかにもいろいろなことを一緒にやりました。」

ズホルトが来たときのことを、長男のニールは次のように話しています。「ぼくは初め少し恥ずかしかったのですが、テニスやバドミントンや卓球をするうちに、すっかり打ち解けていきました。ズホルトはひとりっ子でしたからね、随分ぼくたちに対して忍耐してくれたんだと思います。」

一方ズホルトにとっては、信仰深い末日聖徒の家族の中にしっかりと受け入れられたことが大きな喜びでした。家族のきずなの深さや、家族の祈り、聖典研究、家庭の夕べに感激し、家族が互いに助け合う姿に驚きました。デービス家は音楽一家で、よく集まってはいろいろな楽器で合奏しました。またスポーツ一家でもあり、家族のだれかが出場する試合やスポーツ活動にいつもみんなで開催していました。

ズホルトは次のように言っています。「大家族はとても楽しいということがわかりました。彼らがいろいろなことに取り組む姿勢からたくさんのことを学び、とても勉強になりました。みんなで目標を立てて、互いに励まし合うのです。私もいつかこのような家族を持ちたいと思います。」

ズホルトがデービス家と暮らした1年余りの間に、ハンガリーでも教会が正式に認められるようになったことが、両親や教会幹部の話から知らされました。つまり支部が組織され、国内でのバプテスマが可能になり、教会堂の建築が許可され、伝道活動が始まるのです。ケレスター一家との交流を通して、ハンガリーという国に対して深い親近感を抱いていたキムとニールにとって、その知らせは特にうれしいものでした。

しかしデービス家族はこれで教会員ではない友人に福音を伝えることをやめてしまったわけではありません。キムはこう言っています。「まず福音を愛し、その真髄を知り、自分の証を持たなければなりません。そうすれば友人に福音を伝えずにはいられなくなります。」

ニールはこう言っています。「ときにはむずかしいこともあります。友人に福音のことを話すのを恐れることはないのです。一度やってみれば、だんだん容易になるものです。」

とにかく始めること。それが大切なのです。デービス家の人々が家族の伝道の目標を立てたときには、地球の反対側に住む人々にまで影響が及ぶことや、別の文化圏から来た人によって、家庭の中に愛や喜びが一層深まるなどとは夢にも思っていませんでした。

あなたもとにかく始めてみれば、どんな結果が待っているかわかると思います。□

## ぼくたちの

アルマ・



「さてと、みんな。」私たちのチームが負けた昨夜のバスケットの試合について話し合っていると、ローダー兄弟が口をはさみました。「奉仕活動の計画を立てないとね。」

地味な背広姿のローダー兄弟は、前かがみになって、両腕をひざにおき、ポケットサイズの黒い手帳を眺めています。ローダー兄弟はこの町のある銀行の副社長で、彼のすることはすべて、いつもきちんとしていて、きちょうめんでした。彼は、ちょっと日程表を見てから尋ねました。「さあ、みんな、何をしたらいいだろう。」

部屋は静かになりました。私は計画会のこの時がいつもきらいでした。奉仕活動はあまり好きではなかったのです。奉仕をすること自体はさほど苦にはなりませんでしたが、アイデアを出すとなるといつも行き詰まってしまうのです。浮かんでくるのは、いつも同じようなアイデアばかりでした。

私たちが急に押し黙ってしまったのを見て、ローダー兄弟はこのように提案しました。「セモア姉妹が助けを必要としているんじゃないかな。」

「そうですね。」クリス・フレイはあまり気乗りのしない調子で言いました。「彼女はいつも助けを必要としています。」

私はいすにのけぞって伸びをしました。「でも未亡人はいつも助けを受けているのじゃないかなあ。」私はつぶやきました。「今月は何かほかのことをしませんか。」

「カイル、何か提案でもあるのかい。」私の方をちらっと見ると、ローダー兄弟は直す必要のないネクタイを直しながら尋ねました。

私は少し考えました。「助けの必要な独り暮らしの男の人を選ぶというのはどうですか。」

ローダー兄弟が頭を振り、いら立った様子で天井へ目を向けると、ブラッドとクリスはニヤニヤ笑い出しました。

「ウィラード・ワッツ兄弟に教会に来るように働きかけるといのはどうでしょう。」私は一生懸命笑いをこらえながら提案しました。

「カイル、話を元に戻してもいいかな。」ローダー兄弟はきつい口調で言いました。

「ワッツ兄弟を活発にすることのどこがいけないんで



# 奉仕計画

・イエーツ

すか。」私は尋ねました。

「カイル、私は子供のときからずっと第12ワード部に  
いるがね。私の知っている限り、ワッツ兄弟はその間2  
度しか教会に来たことがない。一度は奥さんのお葬式。  
2度目は友人のお葬式のときだ。彼はたばこも吸うし、  
神のみ名を汚すようなことも言う。何年もの間ホームテ  
ィーチャーを家の中へ入れようとさえしないんだ。私は  
伝道を終わってそれこそ何年にもなるのに、彼の方はい  
まだに長老にさえなっていないんだよ。」

「では、なおさら彼を教会へ連れ戻してもいいころで  
はないのですか。」

「カイル、この計画会をもうそろそろ終わりにしたい  
のだが。」

「では、彼を助けることをあきらめてしまうのです  
か。」

「カイル、彼はずっと前に自分からあきらめたのだ  
よ。」

空腹でお腹がグウグウ鳴る音がしました。昼食を食べ  
に早く家へ帰ることに気持ちが向いていたこともあって、  
ついにセモア姉妹がその月の私たちの奉仕活動の対象に  
指名されました。けれども、私は教会を出て、1月の  
寒々とした外気の中を家へ向かって歩きながらも、ウィ  
ラード・ワッツ兄弟のことが頭から離れませんでした。  
そして、皆から見放されるというのはどんな気持ちだろ  
うかと思わずにはいられませんでした。

ウィラードは、私の家からちょうど5軒先の、車庫ば  
かり大きな赤いレンガ造りのこぢんまりとした家に住ん  
でいました。以前に何年も自動車の修理工をしていたの  
で、暇なときに自動車修理をする作業場を車庫の中に持  
っていました。彼は白髪交じりの髪を短く刈り、丸顔で  
鼻が低く、体格のよい老人でした。無口でめ  
ったに笑顔も見せず、いつもみすぼらしい格  
好をしていました。

日曜の午後、私は家へ入る前に  
ワッツ兄弟の家の方をちらっと見  
ると、数日前に降った雪が所々芝  
生の上に残っていました。彼の古  
ぼけたトラックが家の前にとめて





あり、居間のカーテンは引いてありました。

母に呼ばれて夕食を食べに行った私はウィラードのことをすっかり忘れてしまいました。

4日後吹雪が襲い、一晩で雪が18センチも積もりました。父は朝私を起こし、私の手に雪かき用のシャベルを押しつけ、家の前の歩道の雪かきをするように言いました。そして、急いでやらないと学校に遅れるぞ、とご親切にも注意してくれたのです。私は、ずっとぶつぶつ不平を言っていたのですが、早く暖かい家の中へ入りたかったので、さっさと仕事を切り上げ、朝食をとり家に急いで入ろうとしていたとき、ふとワッツ兄弟の家の方を見ました。窓に明かりはまだついていませんでした。家の周りの雪はそのままになっていました。ちょっと私は思案しました。それから、今までの人生の中で、最も気違い染みたことをしたのです。私は通りを歩いて行き、ワッツ兄弟の家の前の歩道の雪かきを始めたのです。

「君、何をしているんだね。」半分ぐらい雪かきを終えたとき、背後でこわい声がしました。

びっくりして振り向くと、戸口にウィラード・ワッツ兄弟が立っていました。よれよれの上着のポケットに手を突っ込み、襟からくしゃくしゃの頭を出していました。

私は肩をすくめました。「雪を少しどけてきれいにしているだけです。」私はシャベルを道路に立て、足を踏み鳴らしました。

「自分の家の雪かきは自分でするよ。お金が目当てなら払えないよ。」

「そんなつもりではありません。」また雪かきをしながら私は答えました。

彼はしばらくの間見ていましたが、家の中へ引き返しました。私は雪かきを続けました。雪かきをしながら、ウィラードはなぜあんな風に振る舞うのだろうかと考えました。私は早目に雪かきを切り上げ、シャベルを肩にかついで、家へ向かって歩き出しました。「ちょっと、君！」ワッツ兄弟が戸口から私に呼びかけました。そして、手に3ドルの紙幣を握りながら階段を下りてきて、「これだけしか持ち合わせがないんだ」とつぶやくように言いました。「わしはたいいてい自分の仕事は自分でするんだ。」

私はそのお金を見ました。「ぼくは、お金が欲しくてしたんじゃないんです。」

彼は当惑した様子でした。「君はトム・ジョーダンの息子ではないかね。」

私はうなずきました。

「じゃあ、お父さんに言われたのかね。」

いいえ、と答えた私は、学校に遅れそうだといいました。

その後3度、私はワッツ兄弟の家の前の雪かきをしました。雪かきをし終えるといつも彼は1ドル札を2、3

枚持って出てきて、差し出しました。そのたびに私は丁寧に断りました。

最後に私が雪かきをしたのは3月末のことで、その日は吹雪のためにたくさんの雪が積もりました。ワッツ兄弟は20ドル札を持って出てきました。「受け取りなさい。」強い語調でそう言うと、お札を私に押しつけました。

私は首を横に振りながら笑ってこう言いました。「雪かきはいい運動になりますね。」

「どうしてこんなことをする気になったんだ。」彼は尋ねました。

私たちは数秒間、黙って見つめ合っていました。それは、私自身が自問していたことだったのです。その理由を考えてみると、ひとつには皆が彼を単なるひとりのお休み会員として統計上の数字の一部と見なし、人間として心にかけることがないという事実突き当たります。家にたったひとりで住み、人生が終わるのをただ待っているだけのウィラード・ワッツ兄弟のことを、私は最初の朝からずっと気の毒に感じていました。すべての人は、もっとよい人生を送る価値があります。彼が次に教会へ行くのは、彼自身のお葬式ということにもなりかねません。「ぼくはつまり、ただあなたが……。」私はためらい、下唇をかみました。「もう行かなくちゃ。」私はつぶやきました。「学校に遅れるといけないから。」

ウィラードはたばこを取り出して口の端にくわえ、火をつけました。そして、煙を深く吸い込み、吐き出すと、あたかも私に聞かれたくないかのように、「じゃあ、ありがとうよ」とつぶやきました。

4月下旬のある土曜日の朝、若い男性と若い女性はセモア姉妹の家の庭を掃除する計画を立てました。ブラッド・ハントとクリス・フレイは私を誘いに、家へ立ち寄りしました。歩いていく途中、ウィラード・ワッツ兄弟が裏庭でさくを立てているのに気がつきました。

「セモア姉妹のところは、人手が十分足りているよ。」私は立ち止まって言いました。

「もしも奉仕活動を休むと、ローダー兄弟に監督さんのところへ連れていかれるよ」とクリスはニヤニヤ笑って言いました。

「なにも休むわけじゃないさ。ただ計画を変更するだけなんだ。セモア姉妹に電話して、行けないことを連絡しておこう。ワッツ兄弟が助けを必要としているんだ。」

「ワッツのじいさんのことを言っているのかい。」ブラッドは不服そうに言いました。「いくら君が助けたくとも、彼は手伝わせないだろうね。」

私はウィラードの家の庭へ入っていきました。

「まさか本気じゃないだろう。」後ろでブラッドの声がしました。

私はただ歩き続けました。

ブラッドとクリスはちょっとためらいました。しかし好奇心に負けて、すぐ後について来ました。

「さあ、何をしましょうか。」私は元気よくウィラードに尋ねました。

くいを立てる穴を掘っていたウィラードは目を上げました。手の甲で口をぬぐい、最初に私を、それからクリスとブラッドに目をやりました。「金は払えないよ。」吐き捨てるように言いました。

私はシャベルをつかみました。「ぼくたち、何をしたらいいですか。」

最初は少し気まずい雰囲気でしたが、私たちが去ろうとしないので、ウィラードはぶつぶつ言いながらいくつか指示を出し、私たちは仕事にとりかかりました。ブラッドとクリスは初めのうち私のことを正気じゃないと思っていたようですが、一生懸命仕事にかかりました。その仕事は、思ったより大変な作業でしたが、私たちは働き続けました。

ウィラードは一日中次から次へとたばこを吸い

続け、ときたまぶつぶつと指示を出しました。もうこれだけやってもらえれば十分だからと私たちに帰るように何度も言いました。けれども、私たちは仕事をすべてやり終えるまで帰りませんでした。全部終わったのは、午後3時ごろでした。

ウィラードが道具を片づけるのを手伝っていると、ブラッドは「さて、家へ帰らなくちゃ。車の修理をしなくちゃならないんだ」と大声で言いました。

「いつあの年代物の車が動くようになったんだい。」クリスが尋ねました。

「動いてるなんて言ってないよ。修理をしなくちゃと言ったんだよ。」

「どんな車種だね。」ウィラードは尋ねました。

「ええ、1972年型の古いやつなんです」とブラッドは言いました。

「いつか見てあげるよ。」ウィラードは言いました。

「そんなにひどい車じゃないんです。」ブラッドは言いました。

「さあ、何をしましょうか。」私は元気よく尋ねました。最初は少し気まずい雰囲気でしたが、私たちが去ろうとしないので、ウィラードはぶつぶつ言いながらいくつか指示を出し、私たちは仕事にとりかかりました。



「そうなんです。エンジン以外はすべて動くんです。」  
私もそう付け加えました。

その晩、ウィラードはブラッドの家に寄り、その古い車を彼の車庫まで引いてきました。

翌日の定員会で、ローダー兄弟は、私たち3人がセモア姉妹のところへ奉仕活動に行かなかったことを残念に思うと言いました。

「ぼくたちはもっと急を要する仕事を見つけたんです。」私は説明しました。

「ほう、そうだったのか。」

「ええ、ワッツ兄弟の手伝いをしていたんです。」

定員会の出席者のうち、ブラッドとクリスを除いた全員が笑い出しました。私は笑わずに周りを見回しました。

私がウィラードの名を最初にあげたこの前の1月であったなら、笑い声を当然のものとして受け止めたことでしょう。なぜなら、あのときはウィラードは単なる冗談の種でしかなかったからです。でもこの3カ月の間に、彼は私にとってひとりの人間として存在するようになり、さらには友達となったのです。私はそのとき、自分の都合でセモア姉妹の奉仕活動に加わらなかったのではないことを自覚していました。私は心から望んで、ウィラードのところに行ったのです。

1週間後、ウィラードは私に電話をしてきて、クリスとブラッドを彼の家へ連れてきてくれないかと言ってきました。本当にびっくりしました。ウィラードが電話をしてくるなんて、夢にも思っていなかったからです。

私たち3人が彼の家に着いたとき、ウィラードは車庫にいました。ブラッドの古い車が車庫の中央にありました。ウィラードはポケットに手を入れ、ブラッドの車のキーを取り出し、彼にポンと投げました。「どうだい。」ブラッドはキーを受け止め、「動くんですか」と尋ねました。

ウィラードは肩をすくめ、振り向いて仕事台の方へ行き、スパナをいじくりながら、「試してみてごらん」とだけ言いました。

ブラッドはエンジンスイッチにキーをゆっくりと差し込み、回しました。すると、エンジンはまるで猫がのどを鳴らすように快い音を立てました。

「信じられない。」クリスはあぜんとして言いました。

「一体どうやったんですか。」ブラッドは大声で叫びました。

ウィラードは振り向きませんでした。顔は無表情でしたが、目は喜びで輝いていました。「そんないい車を見捨てちゃだめだぞ。」

「いくら払えばいいですか。全部でいくらかかりましたか。」

「全然かからなかったよ。ここらの中古車業者にはちよいと顔がきくんでね。部品を手に入れるのはわけないことさ。」

その後ブラッドとクリスと私は、すっかりウィラードのところに入り浸るようになりました。私たちはガレージで働いたり、玄関の階段に座ってジュースを飲んだり、スポーツの話をしたりしました。彼がたばこを吸うのを見て、1本吸うたびに30分ずつ寿命が縮まる、などと言ってからかうこともありました。

彼はそれを聞くと、とんでもないという表情を見せました。「わしは、あまりに長いこと吸ってきたので、今さらやめることはできないよ。」しかし、その後私たちが訪

「そんないい車を見捨てちゃだめだぞ」と、ウィラードが言いました。その後、ブラッドとクリスと私は、ウィラードのところに入り浸るようになりました。私たちはガレージで働いたり、玄関の階段に座ってジュースを飲んだり、スポーツの話をしたりしました。彼がたばこを吸うのをからかうこともありました。





ねたとき、彼がたばこを捨てようとしていることに気がつきました。

数日たったある日の午後、私たちが彼の車庫で座っていると、ウィラードがいつもより神経質になっている様子でした。手をズボンにこすりつけたり、首の後ろをひっかいたり、足を引きずりながら小刻みにあちこち歩き回ったりしていました。

「どうかしたんですか、ウィラード。」ブラッドは尋ねました。

ウィラードはつらそうでした。ほほえもうとしましたが、かえってしかめっつらになってしまいました。あごの無精ひげをなでながら言いました。「2、3日ずっと吸っていないんだ。続くかどうかはわからないが。」

少しの間、私たち3人は黙っていましたが、クリスがとび上がるようにして言いました。「ウィラード、できますよ。気持ちをそらす物が何か必要です。ガムをかんでみたらどうですか。」

「ガムどころか、今ならつめだって何だっかってかみたくなるよ。」

「忙しくしていることも必要ですよ。」私は提案しまし

た。「ぼくのおじさんもたばこをやめたんです。たばこを忘れる唯一の方法は忙しくしていることだと言っていましたよ。くたくたになるまで働いたんです。」

私たちはその日はずっとウィラードと一緒にいて、彼がたばこを忘れるのを助けてました。私たちが彼の家を出たのは10時近くでしたが、そのころにはたばこを吸いたいという衝動を克服していました。私たちの知る限り、それ以来決してたばこを口にしませんでした。

「ちょっと、ウィラード、お願いがあるんですけど……。」私たちがブラッドの車のオイルの交換をしていたある午後、私は言いました。「ぼくたち、今週末に教会でやる食事会の当番なんです。」私は肩をすくめ、ほおがほてるのを感じました。「ワード部の青少年が、年配の人のために夕食を準備することになっているんです。あなたのことを年配とかそんな風に思っているわけではないんですけど。」私はすぐに付け加えました。「でもあなたに来てほしいと思ってるんです。どうですか。」

ウィラードは目を上げました。私たち一人一人を見つめてから車のエンジンに目を落とし、長いこと黙っていました。そして、ゆっくりと後ろのポケットから布切れを取り出し、手をふきました。口元にはかすかな笑みが見えました。「わしが最後に教会へ行ったのは、妻が死んだ時だ。もう3年以上にもなる。その前はもっとずっと前だ。教会へ戻りたいと思ったことは何度かあったが、それらしき理由を思いつかなくてね。それに知っている人がだれもいないんだ。」

「今ならちゃんとした理由がありますよ。ごちそうがあるし、あなたはぼくたちを知っています。ぼくたちが一緒ですから。」私は一つ一つはっきりと言いました。

「どうして君たちは、にぎやかな夕食会にわしを一緒に行かせたいのかい。」彼は私たちの方を見ずに尋ねました。

ちょっとした間、私は何て答えたらよいか考えました。「それは、あなたがぼくたちの友達だからです。」私は簡単に答えました。

彼は首を振りました。「さあどうしたもんかな。皆がじろじろ見るだろうし、なぜこのわしが来たか不思議がるだろう。」

「ぼくたちが一緒にいます。」ブラッドは大声で言いました。「ずっと一緒にいます。約束します。」

私たちは皆、息を殺して待ちました。ウィラードは長い間考えていました。やっと、緊張がほぐれ、ほほえみが浮かびました。「じゃあ考えておくよ。」

その夕食会の夜、私は神経が高ぶって仕方ありませんでした。クリスと私が教会で準備するのを手伝っている間に、ブラッドがウィラードを迎えに行くことになっていました。

「今夜、だれかを招待したのかね。」私が台所から



ホールのテーブルへ食べ物を運んでいると、ローダー兄弟が尋ねました。

「ウィラード・ワッツ兄弟です。」

ローダー兄弟はため息をつきました。「ウィラード・ワッツのことにいつまでこだわっているつもりかい。」そんなことはとうてい無理だと言わんばかりに、笑いながら言いました。「ウィラードじいさんを教会へ連れてきたら、君が今まで食べたことのないようなごちそうをおごるよ。」

ちょうどそのとき、クリスとブラッドが真ん中にウィラードをはさんで、ホールのずっと向こう側のドアから入ってきました。ローダー兄弟は彼らの方に背を向けていたので、彼らがすぐ後ろに来るまで、近づいてきたことに気がつきませんでした。振り返ったローダー兄弟は腰を抜かさっぱり驚きました。

「ローダー兄弟。」私は元気よく言いました。「ぼくたちのすばらしい友人であるワッツ兄弟です。」

「ウィラードじいさんを教会へ連れてきたら、君が今まで食べたことのないようなごちそうをおごるよ。」

しばらくの間、ローダー兄弟は口をきくことができませんでした。それから彼は手を差し出し、ウィラードにあいさつしました。「あなたのことはいろいろとうかがっています。」口ごもりながら言いました。「ここにいる少年たちがあなたのことについていろいろと話してくれました。」私たち3人を見てから、ウィラードの方を再び見て続けました。「この子たちが話してくれたことはすべて本当のようですね。」

ウィラードはうなずきながらこう言いました。「本当にいい子たちです。この子たちの言うことはすべて信じてもらっていいですよ。」

ブラッドとクリスがウィラードを向こうへ案内すると、ローダー兄弟は私の方を向き、つぶやきました。「こんなことになるとはとても信じられないよ。君にごちそうをしなくてはね。」

私は首を横に振りました。うれしくて胸がいっぱいで、言葉がのどに詰まってしまいました。「そのことは忘れてください。」そして、ほほえみながら言いました。「人はただ褒美をもらうために行動するわけじゃないこともあるんですから。」□







「アンモンとラモーナイ王」スコット・スノー画

レーマン人への伝道の中で、モーサヤ王の4人の息子のひとりアンモンは、イシメルの地を目指して旅をした。アンモンは捕らえられ、その地の支配者であるラモーナイ王の前に引き出された。だが、ラモーナイ王の好意を得たアンモンは、その地にとどまり、王の宮殿で僕として働くことを許される。その後、アンモンは王の羊の群れが散らされるところを、敵の手から救うことができた。ラモーナイ王はもっとよくアンモンについて知りたいと願う。アンモンは王の前に召し出され、神、イエス・キリスト、福音について王の質問に答えた。すると、ラモーナイ王はみたまに満たされ、生まれ変わったのである。間もなく、ラモーナイ王の大勢の民が王の模範に従うようになり、レーマン人の中に神の王国を築くうえで、大きな力となった。

(アルマ17-19参照)





「されば汝らもし神に仕えんと望むならば、汝ら神の業に召さるるなり。そは、見よ畑は早白くして刈り入れを待つが故なり。また見よ、勢力をつくして鎌を入れる者は、亡びずしてその身も霊も救いを得るために庫に積み入るるなり。」(教義と聖約4：3-4)